

芦屋市文化財調査報告 第50集

津 知 遺 跡

(第181地点)

発掘調査報告書

——共同住宅建設事業に伴う遺跡西限部の様相把握——

2004.5

芦屋市教育委員会

刊行にあたって

6,433人の尊い命を奪った阪神・淡路大震災からちょうど9年を迎えることになります。新しく生まれ変わった街並みや平穏な日常をとり戻した今、震災の記憶が著しく風化しつつあることを感じます。

この地震は、本市の発展と市民生活に多大な影響をもたらしましたが、震災の帯にのる津知町の被害は甚大であり、全半壊家屋があわせて85パーセントを超えただけでなく、死亡者も48人の多きに達しました。

津知はごぞんじのように、芦屋市の前身である精道村の母体となった旧四ヶ村（芦屋村・打出村・三条村・津知村）の一つで、近世には本庄九ヶ村を構成する一村として神戸市東灘区の村々とも日常生活での連帯がありました。そして、本書で発掘成果を報告する津知遺跡は、この村の成立事情や前史、さらに変遷の歴史を知る上に欠かすことのできない遺構と遺物を包蔵し、たび重なる埋蔵文化財調査によってその一部があからさまとなりました。

本書は、その成果の一つが調査関係者によって文化財保護の観点からまとめられたものです。最後にいまなお復興のさなかにある被災者の健康と今後の発展を祈り、本書がひとりでも多くのひとびとに活用されることを望む次第です。

平成16年5月31日

芦屋市教育長 藤 原 周 三

例 言

1. 本書は、芦屋市教育委員会が平成15年度に実施した津知遺跡（第181地点）の発掘調査報告書である。発掘調査は、平成15年4月25日～同年5月28日の期間（実働21日間）実施した。
2. 津知遺跡（第181地点）の発掘調査は、共同住宅建設事業を原因として実施された。調査経費並びに出土遺物整理費、報告書作成費は、原因者負担による。
3. 発掘調査の対象とした津知遺跡（第181地点）は、兵庫県芦屋市津知町、芦屋西部第二地区震災復興土地区画整理地区27街区11の一部、12、20、21、22の一部に所在し、事業地面積は1,554.76㎡である。
4. 発掘調査は芦屋市教育委員会が主体となり、下記の者が担当した。

森岡秀人（芦屋市教育委員会社会教育部文化財課主査・学芸員）
坂田典彦（芦屋市教育委員会社会教育部文化財課非常勤嘱託・学芸員）
5. 出土遺物の整理作業（洗浄・註記・復元・実測・製図・写真撮影）並びに報告書作成は、森岡秀人・坂田典彦が担当し、その指導の下、下記の者が従事した。また、一部に仲谷由利子・高橋美代子・山本麻理の協力があつた。

楠 貴大 天羽育子 池田計彦 梅本素子 田中由理
6. 当調査に係る経理・諸届出事務は、芦屋市教育委員会社会教育部文化財課課長 西川孝夫、主査 森岡秀人、主査 田中尚美が担当した。
7. 本報告に関わる出土遺物や写真・測図資料・報告書図版原版は、芦屋市教育委員会三条埋蔵文化財整理事務所において保管している。広く市民・研究者の活用の便を図りたく考えている。
8. 本書の執筆・編集は、森岡秀人・坂田典彦両名が担当した。

津知遺跡第181地点発掘調査報告書

目 次

刊行にあたって	芦屋市教育長 藤 原 周 三
例言	
目次	
第1章 はじめに	
第1節 調査に至る経緯	
1) 発掘調査の発端	(森岡秀人) 1
2) 調査までの協議と経過	(森岡) 1
第2節 位置と歴史的環境	(坂田典彦) 2
第3節 既往調査の概略	
1) 阪神・淡路大震災の復興調査と津知遺跡の保護	(森岡) 4
2) 津知遺跡調査成果の要点	(森岡) 4
第2章 発掘調査報告	
第1節 調査の方法と経過	
1) 調査の方法	(坂田) 7
2) 調査の経過	(坂田) 8
第2節 基本層序	(坂田) 11
第3節 検出遺構	
1) 遺構面1	(坂田) 16
2) 遺構面2	(坂田) 18
3) 遺構面3	(坂田) 20
第4節 出土遺物	(坂田) 23
第5節 小結	(坂田) 31
第3章 まとめ	
1) 古代津知遺跡西限部の様相について	(坂田) 32
2) 中・近世の津知遺跡と津知村の成立状況	(森岡) 32
3) 円面硯の出土と芦屋川水系古代遺跡にみられる陶製硯について	(森岡) 33
引用・参考文献一覧	
報告書抄録	
編集後記	

挿 図 目 次

第1図 兵庫県と芦屋市の位置	1	第6図 西区トレンチ1 機械掘削(南から)	8
第2図 芦屋市内遺跡分布図(1/50000)	3	第7図 作業風景(東から)	8
第3図 津知遺跡既往調査地点分布図(1/2500)	6	第8図 調査風景(南から)	8
第4図 トレンチ配置図(1/1000)	7	第9図 北区トレンチ3 機械掘削風景(北から)	9
第5図 調査開始前風景(南から)	8	第10図 北区トレンチ3 調査風景(北東から)	9

第11図 埋め戻し風景 (南から)	9	第20図 SK201	19
第12図 調査終了後の状況 (南東から)	9	第21図 SK202	19
第13図 トレンチ1 西壁・トレンチ2 西壁 土層断面図 (1/40)	12	第22図 SD201	19
第14図 トレンチ1 南壁・トレンチ2 南壁 土層断面図 (タテ1/40、ヨコ1/120)	13	第23図 遺構面3 (1/150)	19
第15図 トレンチ3 東壁・トレンチ4 東壁 土層断面図 (1/40)	14	第24図 トレンチ2 足跡検出状況 (1/40)	22
第16図 西区 トレンチ2 西壁土層断面	15	第25図 出土遺物実測図 (1/4)	24
第17図 東区 トレンチ1 調査風景	15	第26図 出土遺物実測図 (1/4)	26
第18図 遺構面1 (1/80)	17	第27図 出土遺物実測図 (1/4)	28
第19図 遺構面2 西区 トレンチ1 (平面図1/60、断面図1/20)	19	第28図 出土遺物実測図 (1/4)	29
		第29図 出土遺物実測図 (1/4)	30
		第30図 東川右岸の自然流路 (弥生時代～古代末)	31
		第31図 芦屋川水系の古代遺跡と円面碗の出土分布	33

表 目 次

第1表 津知遺跡 主要発掘調査の成果と報告文献一覧	5
---------------------------------	---

図 版 目 次

図版1 西区 トレンチ2 機械掘削風景 (西から)	35	調査終了後の状況 (南から・奥が六甲前山)	37
西区 トレンチ2 機械掘削風景 (南から)	35	出土遺物 (1～3層)	37
西区 トレンチ1 遺構面1 (東から)	35	図版4 出土遺物 (1～4層・遺構面1)	38
西区 トレンチ1 遺構面1 (南から)	35	出土遺物 (4・5層・遺構面1)	38
西区 トレンチ1 遺構面2 (南から)	35	出土遺物 (SR301)	38
西区 トレンチ1 調査風景 (東から)	35	図版5 出土遺物 (6層)	39
西区 トレンチ1 遺構面3 (南から)	35	出土遺物 (陶磁器・1・2層)	39
西区 トレンチ1 遺構面3 (東から)	35	出土遺物 (近世以降の土器溜り)	39
図版2 西区 トレンチ2 遺構面1 (南から)	36	図版6 出土遺物 (1～3層・近世以降の土器溜り)	40
西区 トレンチ2 遺構面3 (南から)	36	出土遺物 (3・4層)	40
東区 トレンチ2 北壁土層断面	36	出土遺物 (3・4層)	40
東区 トレンチ1 遺構面3 (西から)	36	図版7 出土遺物 (3～5層)	41
北区 トレンチ3 東壁土層断面	36	出土遺物 (5層)	41
東区 トレンチ1 南壁土層断面	36	出土遺物 (5・6層)	41
東区 トレンチ2 完掘状況 (西から)	36	図版8 出土遺物 (4・5層)	42
北区 トレンチ4 完掘状況 (南から)	36	出土遺物 (5層)	42
図版3 北区 トレンチ3 完掘状況 (北から)	37	出土遺物 (4層)	42

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

1) 発掘調査の発端

兵庫県芦屋市は、平成16年1月1日現在、面積18.57km²の市域に89,651人の人口を擁する小都市である。その市街地には大規模な集落遺跡や生産遺跡が点在するが、津知遺跡も各時代の遺構・遺物が複合して出土する大きな遺跡の一つであり、遺跡面積は目下のところ71,800m²と把握している〔森岡・竹村編2001〕。

上記の周知範囲で（株）大地（代表取締役 永井佳子）より共同住宅建設（鉄筋コンクリート造4階建新築）の計画がもちあがり、文化財保護法第57条の2第1項の規定にしたがい発掘届出書が市教育委員会文化財課に提出された。事業地（面積1,554.76m²）は、兵庫県芦屋市津知町、芦屋西部第二地区震災復興土地画整理地区27街区11の一部、12、20、21、22の一部に所在する被災地であり、市教育委員会は平成14年12月26日に森岡秀人（文化財課主査・学芸員）を担当者として確認調査を実施した。確認トレンチは4本を数え、すべて5m前後の大きさである。その結果、古墳時代～中世の遺構・遺物が出土し、判断の結果、本発掘調査の実施に至った。（森岡秀人）

2) 調査までの協議と経過

平成15年1月10日以降は、地権者側と調査にかかわる日程・経費の諸協議を進め、1月20日には確認調査結果（カルテ）を正式に打診した。これを受け、兵庫県教育長からは永井佳子宛、「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について」（教文第1784号、平成15年1月28日付）が通知され、工事着手前の本発掘調査が指示された。2月に入ってから、設計プランを基に工事損壊部分の正確な把握とともに調査面積の算定を行い、国庫補助金の適用基準との照合などさらに協議を継続して、調査面積（約224m²）の求積結果並びに教育委員会の調査期間を原因者に明示した。なお、発掘作業委託については、（株）間地工業と地権者との間で締結し、平成15年度に入って教育委員会を含む3者協定を結び、調査着手に至った。（森岡）



第1図 兵庫県と芦屋市の位置

第2節 位置と歴史的環境

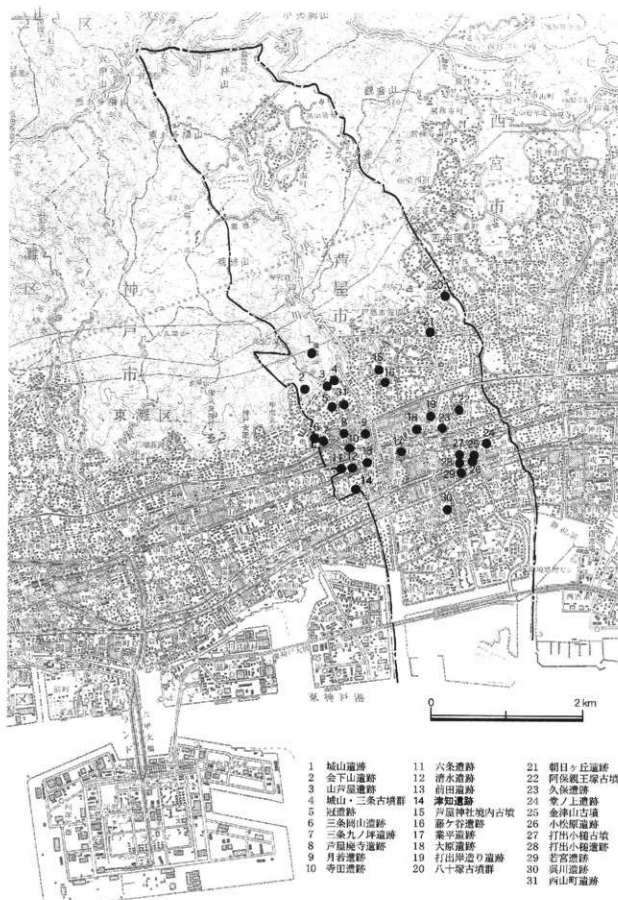
津知遺跡は、市域西端部に位置し、現在の津知町・川西町に所在する。遺跡の範囲は、東西約440m、南北約240mを測り、総面積は80,250㎡である。分布範囲の西および南側は神戸市との市境と接する。さらに、北側の国道2号線は、六条遺跡・清水遺跡・前田遺跡との分布境界をなしている。遺跡の立地環境は、芦屋川右岸扇状地末端部から深江海岸につながる扇状地間低地に位置しており、標高5～12mを測る。また、遺跡内には、近世・近代にかけて、芦屋川から本庄九か村のうち五か村（三条・津知・森・中野・深江）に排水する幹線水路として使われた東川（津知川）が流下している（武藤ほか編1971、和田1982、森岡・竹村・古川編1999）。本報告の調査地点は東川右岸に相当し、標高は6～7mを測る。この東川を境に古代末頃までは、右岸と左岸で堆積環境、各時期の遺跡の様相に大きな違いをもたらしていることが明らかになってきている（辻2003など）。中世に入ると、当河川の流路固定が始まり（本遺跡第28地点、北接する六条遺跡第18地点など）、耕作地拡大に拍車をかけるようになる。

遺跡内には、古代山陽道の推定ルートが東西に走行しており、葦屋驛の所在地も含め、津知町のルーツを解明する重要な位置に立地している（森岡2001・2003a・2003b）。また、遺跡中央に位置する日吉神社の境内には、「永正十七年(1520)辰正月大弁才口口」と刻まれた市指定文化財の石祠（市内最古の金石文）がある。「永正十七年」といえば、摂津豊島の土豪、瓦林正頼が越水城に布陣した頃であることから、この石祠は細川澄元方の武将が戦勝祈願のため造立したとみる説がある（武藤ほか編1971、森岡1993）。

以下、既往の調査から主だったことがらを取りあげ、歴史的環境を概観していきたい。まず遺跡発見の契機は、昭和62年に実施された確認調査に遡る。第2地点では8世紀末～9世紀前半の掘立柱建物5棟をはじめ、和同開珎・萬年通宝・緑釉陶器・灰釉陶器・軒瓦・墨書土器・円面硯・転用硯など豊富な遺物が出土している。第4地点では、混入遺物であるが旧石器時代後期の翼状剥片と、古墳時代後期の水田跡が検出され導水施設が明らかにされた。さらに、古代以降の河川から出土した束播系須恵器碗の底面に書かれた墨書と、六条遺跡第18地点の土坑（井戸の性格をもつ土坑。12世紀前半）から出土した墨書土器が器種・文字・墨書位置とも一致したことから、両遺跡を南に流下する東川（津知川）の前身河川が上記の遺物を結びつける媒体となったと思われる。第19・157地点では、平安時代後期以降の掘立柱建物が出検されており、条里地割り区画内での土地利用が考察された。第24地点では、中世の遺物包含層と旧地形による落ち込みを検出している。第28地点では中世の建物跡や、東川左岸の堤状遺構が検出されている。第43地点では、古墳時代後期の畦畔が検出されており、該期の水田経営の一端が窺われた。第89地点（津知公園内）では、中世の遺物包含層が検出されている。

周辺の調査では、当遺跡分布範囲の南西に接する神戸市深江北町遺跡で弥生時代終末～古墳時代初期の円形周溝墓群、古墳時代から古代の集落・水田跡が検出されている。さらに、西方に位置する神戸市本庄町遺跡では、縄文時代の貯蔵穴や弥生時代前期末頃と推測される小区画水田が14枚検出されている。やはり同一地域内にある津知遺跡と絡めた複合的・総合的な遺跡認識が必要であろう。

阪神・淡路大震災以降、区画整理事業に伴い発掘件数は増加し、それとともに遺跡の特殊性・重要性が明らかになりつつある。戦災・震災と2度にわたる被災を受けたにもかかわらず、津知町の足下には旧石器時代以降、人々の歴史の営みが克明に刻み込まれている。（坂田典彦）



第2図 芦屋市内遺跡分布図 1/50000

第3節 既往調査の概略

1) 阪神・淡路大震災の復興調査と津知遺跡の保護

平成7年1月17日(火)未明、午前5時46分、凄まじい突き上げや揺れと共に約20秒間、マグニチュード7.2の規模で発生した兵庫県南部地震は、夜が明ける前の寝床にいる人が多かった阪神間の市民生活を寝耳に水のごとく襲った。震源地は淡路島の北方沖合の北緯34.6度、東経135.0度の位置で、震源の深さは20kmを測る。気象庁の地域機動観測班による現地調査では、淡路島の北淡・一宮・津名の3町、神戸市須磨区鷹取付近、長田区大橋付近、兵庫区大開付近、中央区三宮付近、灘区六甲道付近、東灘区住吉付近、西宮市の夙川付近が震度7と判定されており、本市においては三条町の一部と山手町の一部、およびJR芦屋駅近辺で同じ震度7が測定されている。

のちに「阪神・淡路大震災」と呼称されるようになったこの都市直下型の大規模地震災害は、本市全域に著しい被害をもたらし、平成7年10月30日のデータで、市内での死亡者429人(他市市民13人を含む)、市民の死亡者数419人(他市での死亡者3人を含む)に達し、市民200人に1人の割合で死者を出すという大惨事となった。

平成7年1月17日、兵庫県下の被災10市10町には、「災害援助法」が適用され、大阪府下の5市もその対象となった。また、平成7年1月25日には、兵庫県下の神戸市・尼崎市・西宮市・芦屋市・伊丹市・宝塚市・川西市・明石市と津名郡津名町・北淡町・一宮町・東浦町・五色町、並びに大阪府豊中市に「激甚災害」の指定がなされた。

この震災により、本市のライフラインは大きなダメージを被り、水道は市内全域で直後に断水した。ガスも直後は市域全体が供給停止となり、電気のみが早くに回復し、1月22日の午後11時には市内全域で応急復旧した。市民生活がまたたく間に斯たれ、都市の弱さは歴然とした。

このような状況下、埋蔵文化財については、震災直後1週間で、兵庫県教育委員会の依頼により、遺跡ごとの被災状況が調査され、被災地における該当数280遺跡、面積253.6haにのぼることが判明した。文化庁は、この事態に直直し、早期の現地調査を踏まえて、平成7年2月23日付庁保記第144号の次長通知により、被災自治体に当面の扱いを指導した。そして、復興事業全般に関しては、その円滑な推進と同時に、埋蔵文化財保護との整合を図ることが強く望まれ、文化庁は法的な緩和措置を行い、人道支援や財源確保の三位一体の施策を展開した。文化庁はその具体策として、平成7年3月29日付庁保記第144号により、その取扱いを定めた「阪神・淡路大震災の復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財の取扱いに関する基本方針について」(以下「基本方針」とする)が次長通知として出され、弾力的対応による記録保存のための発掘調査の体制が急ピッチに整えられていった。

震災後の平成7年2月、芦屋市は「芦屋市震災復興基本方針概要」を公表し、その一環として土地区画整理事業を進めたが、西部第二地区(施工区域10.9ha)は、川西町と津知町を対象としたため、津知遺跡の包蔵地範囲とオーバーラップするところとなった。そのため、芦屋市教育委員会ではその範囲を正確に把握するための確認調査を実施した。この調査は森岡と竹村忠洋の2職員が担当し、先行買収地21ヶ所について、平成9年8月5日～9月16日の期間行った。その後の調査は、本遺跡の保護を目的に確認調査で拡大した範囲について対象とし、発掘調査や工事立会を行っている。(森岡)

2) 津知遺跡調査成果の要点

津知遺跡に関するさまざまな調査活動は、昭和62年2月の確認調査(第1地点)を皮切りに平成16年3月末現在236地点におよんでいる。そのうち約95%以上が震災以降に実施されたものであり、発掘調査の著しい増大が復興事業関連のものであることは明らかである。

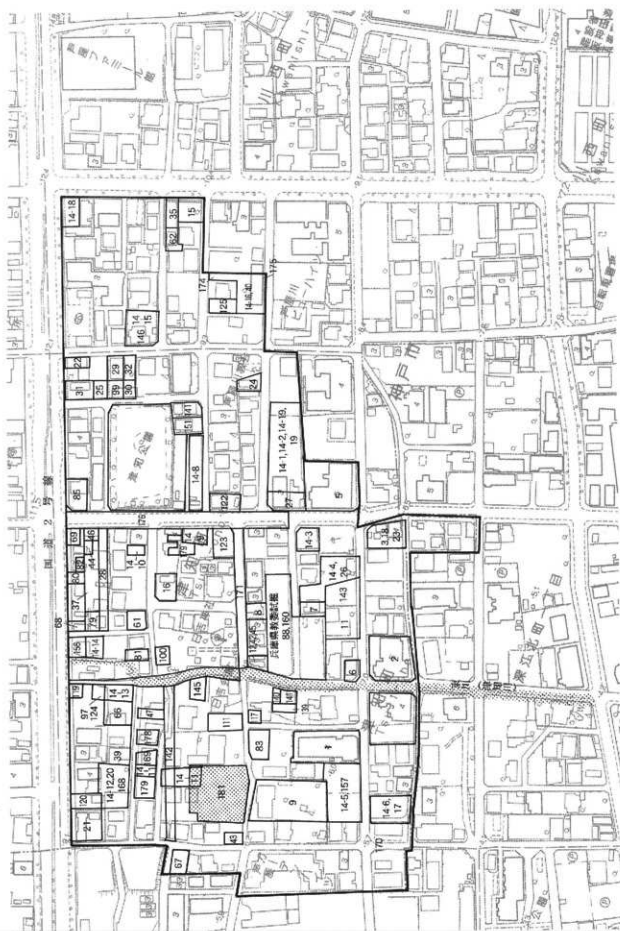
第3図は主要な調査地点を都市基本図(1:2500)にプロットしたものであり、第1表はさらにその成果内容を検討して、ある程度性格づけを行うことのできた調査地点を一覧に供したものである。

調査地点	調査年度	調査機関	遺構の特徴	遺物の特徴	文 献
第2地点 (共同住宅建設)	平成5年度	淡神文化財協会	奈良時代～平安時代前期 掘立柱建物跡 (大型建物・柱穴多数)	古代瓦・緑釉陶器・円面硯 黒雲土器・皇朝十二銭(和 同開珎・萬年通寶)	阿部1993a・1993b 森岡1999a
第4地点 (共同住宅建設)	平成5年度	芦屋市教育委員会	古墳時代の区画水田跡 古代の河川3条・堀 中世の石組井戸・集石土坑 石敷土坑・柱穴・河堤	後期旧石器時代の国産型 ナイフ部石器・黒雲土器・黒 雲土器(須恵器境)・埴 羽釜・埴鉢・埴鉢	和田1994a・1994b 竹村1999
第14地点 (範囲確認)	平成9年度	芦屋市教育委員会	芦屋市教育委員会 対象地21ヶ所(先行買収) トレンチ数31本 (確認調査区面積599㎡)	遺跡全体に中世遺物包含 層。要所に遺構を確認。	実績報告(森岡・竹 村)・竹村編1999
第17地点 (公園建設)	平成10年度	芦屋市教育委員会	重複する各時代の水田跡 導水路・噴砂・道路状遺 構・柱穴・溝・土坑	石椀・弥生～中世の土器・ 埴蓋・木器・土師・緑釉陶 器など。	竹村編1999
第19地点 (市営住宅建設)	平成11年度	支援調査 (兵庫県教育委員会)	平安時代の掘立柱建物跡 溝・土坑・噴砂・流路	土師器・須恵器・瓦器・灰 釉陶器	篠宮編2000
第20地点 (公園建設)	平成11年度	芦屋市教育委員会	古墳時代・古代末～中世の ビット・埴蓋・流路	土師器・須恵器・灰釉陶器・ 瓦器・陶器・土師	竹村・山内編2003
第26地点 (公園建設)	平成12年度	芦屋市教育委員会	古墳時代・古代末～中世の 土坑・ビット・埴蓋・水田 段差・溝・耕作痕・流路	弥生土器・土師器・須恵器・ 陶器・白磁・青磁・瓦・土 師	竹村・山内編2003
第28地点 (新設道路建設)	平成12年度	芦屋市教育委員会	古墳時代前期初頭の流路 古代末の東川の堤状遺構 古代末～中世の耕作面	サヌカイト片・弥生土器・ 土師器・須恵器・黒色土器・ 瓦器・陶器・磁器・瓦・土 師	竹村・山内編2003
第37地点 (擁壁建設)	平成12年度	芦屋市教育委員会	古代末～中世の耕作面・埴 蓋・流路	弥生土器・土師器・須恵器・ 瓦器・陶器・磁器	竹村・山内編2003
第39地点 (擁壁建設)	平成12年度	芦屋市教育委員会	古代末～中世の耕作面。 栗川低地帯の形成に關する 知見	土師器・須恵器・瓦器・陶 器・磁器・土師	竹村・山内編2003
第89地点 (公園建設)	平成13年度	芦屋市教育委員会	古代末～中世の耕作面	土師器・須恵器・瓦器・陶 器・磁器	竹村・山内編2003
第142地点 (新設道路建設)	平成14年度	芦屋市教育委員会	古墳時代～中世の流路7 条。古代末～中世の耕作 面	後期旧石器時代の眞鍮割 片・石簀・弥生土器・土師 器・須恵器・黒色土器・土 師・陶器・磁器・土師・眞 鍮・獸骨	竹村・山内編2003
第157地点 (共同住宅建設)	平成15年度	芦屋市教育委員会	掘立柱建物跡	弥生土器・土師器・須恵器・ 黒色土器・瓦器・陶器・磁 器・土師・獸骨	森岡・坂田編2004
第168地点 (貯水槽建設)	平成15年度	芦屋市教育委員会	20地点と同一事業地。古 代末～中世の耕作面・埴 蓋・流路	弥生土器・土師器・黒色土 器・瓦器・須恵器・陶器・ 磁器・土師・獸骨	竹村・山内編2003
第181地点 (共同住宅建設)	平成15年度	芦屋市教育委員会	本書	本書	森岡・坂田編 本書

第1表 津知遺跡 主要発掘調査の成果と報告文献一覧

以上、調査成果を瞥見して明らかなように、津知遺跡が旧石器時代後期や縄文時代晩期から、江戸時代に及ぶ大きな複合遺跡の一つであり、①古墳時代後期～飛鳥時代 ②奈良時代～平安時代前期 ③平安時代末期～鎌倉時代初期、の3期にわたって画期が存在することがわかる。これらについては、若干の考察を加えつつあるが〔竹村2003、森岡2004〕、②の時期には公的性格の建物跡にも恵まれ、文献上の葦屋駅家や葦屋郷家、菟原郡家などの関連が気になるところである。また、③の時期に関しては、やはり文献史料に登場する葦屋庄や方格地割の実質的確立期との関連など、今後多くの課題を残していよう。

(森岡)



第3図 津知遺跡既往調査地点分布図 (1/2500)

第2章 発掘調査報告

第1節 調査の方法と経過

1) 調査の方法 (第4～12図、図版1～3)

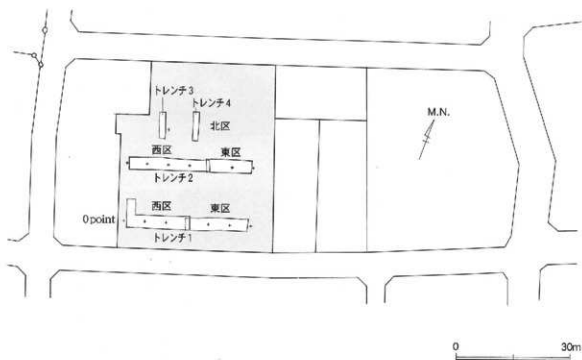
調査地内で、遺跡が建築によって損壊を受ける部分に次のトレンチを設定し、調査区とした。南北3m×東西15mのものを中央部～南域に2本、東西1m×南北7mのものを調査地北域の浄水清建設予定部分に2本、以上の4本である。前者の南側をトレンチ1、北側をトレンチ2、後者の西側をトレンチ3、東側をトレンチ4と呼称する。また、トレンチ1・2の西半部を西区、東半部を東区とし、トレンチ3・4を北区とする。

残土スペースと撮影用足場設置場所確保のため、調査は反転掘削で行った。まず、トレンチ1・2の西半部を調査し、西区を完全に終了した後に、その埋め戻しと東区・北区の機械掘削に着手した。表土および近現代の盛土は重機で掘削し、残りは人力によって層ごとに掘削した。

掘削によって排出される残土は、すべて調査地内に仮置きし、調査終了後にはコンクリートのガラを分別して埋め戻し、現状復旧した。

測定の定点となる基準杭は西区トレンチ1の西端に設定し、これを基に5m間隔で調査杭を打設した。すべての平面図はこれを使用するとともに、平板実測図に記入した。基準高は、本市下水道台帳図記載(平成4年)マンホール高T.P.+6.740mから水準測量によって求めた。

記録は、写真と実測図により、写真は35mm白黒・カラーポジの2種類のフィルムを用いて撮影し、簡易撮影としてデジタルカメラを使用した。実測図は調査区配置図を縮尺1/100で、調査区遺構平面図および土層断面図を縮尺1/20で、遺構断面図・立面図を縮尺1/10で作成した。(坂田)



第4図 トレンチ配置図 (1/1000)

2) 調査の経過

今回の調査は、準備工を含め4月25日から着手し、5月28日までの1ヶ月間を要して実施した。真夏を彷彿とさせる暑さと、降雨日の多さには段取り変更が幾度となく行われた。梅雨前であるにも拘わらず雨の日が多く、4月30日・5月8・14日を中止にしたものの、幾日かはブルーシートで TENT を張り、実測を遂行したことも記憶に残っている。以下に、調査日誌の概略を記載する。

調査日誌抄

4月25・26日(金・土) 曇り

事前準備開始。ユニットハウス・トイレ・防塵シートの設営を2日間で完了させた。調査道具・整理作業道具の搬入。ユニットハウスは2階建てで、1階を作業員の待機兼道具部屋として、2階を市教委の作業部屋とした。都市整備課、西川文化財課課長来訪。

4月28日(月) 曇り

今回の調査は、調査区を西区と東区に分け、反転掘削を進めることとした。まず、西区を先行調査した。西区の中で、南北3m×東西15mのトレンチを2箇所設定した。本日は、南側のトレンチ(以下、西区トレンチ1)の機械掘削を開始した。掘削は、表土(1層)から近現代の耕作土(3層)下位まで行い、排出される残土は4tトラックで調査区北端スペースに仮置きした。現時点で、調査区中央に大きな攪乱があり、溜まり水が著しい。堆積層が遺存している箇所では、すでに掣溝が見えている。トレンチ内に5mピッチで調査杭の打設を行った。

4月29日(火) 晴れ

「みどりの日」で祝日。

4月30日(水) 雨

雨天のため作業中止。

5月1日(木) 晴れ

西区北側のトレンチ(以下、西区トレンチ2)の機械掘削開始。掘削は、西区トレンチ1と同様に近現代の耕作土までを取り除いた。当トレンチは、西区トレンチ1より攪乱が著しく、攪乱土坑内にはコンクリートのガラなどが埋まっていた。

西区トレンチ1では、第3層下面(遺構面1)で東西方向の掣溝とビットを検出した。南からの撮影は2段の足場で、西からは3段の足場で遺構面の撮影を行った。なお、調査杭の打設は本日で完了した。

5月2日(金) 晴れ

本日の日差しは強く、スタッフとともども一日で真っ赤に日焼けした。午前中は西区トレンチ1の



第5図 調査開始前風景(南から)



第6図 西区トレンチ1機械掘削(南から)



第7図 作業風景(東から)



第8図 調査風景(南から)

平面実測を縮尺1/50で、遺構断面実測を縮尺1/10で行った。溝は計6条検出し、東西に走向する2条の溝が新しい。この2条の溝は、埋土が礫混じり粗粒砂で、攪乱によって消滅するエリアまでは、明確に確認できた。西区トレンチ2では遺構面精査、攪乱部分の除去に着手した。西区トレンチ2では、不定形の土坑(SK101・102)とピット(P104)を検出し、足場を組んで北と西から撮影した。

5月6日(火) 晴れのち曇り

西区トレンチ1で、遺構面2の精査。1条の東西溝(SD201)と、土坑2基(SK201・202)を検出し、実測に着手した(平面1/50、断面1/10)。西区トレンチ2では、耕作痕と足跡を確認した。

また、調査区配置図(縮尺1/100)のトランシット測量も行った。西川課長来訪。

5月7日(水) 曇り時々雨

西区トレンチ1・2ともに掘り下げ。西区トレンチ1では、西端で流路(SR301)を検出した。流路は北東から南西に流下すると思われる、西肩は調査区外に外れる。幅は、少なくとも2mを超えらると思われる。夕方に流路の底を確認することができた。深さは60cmを測り、流水堆積である。東川の氾濫による一過性のものか、枝川かの判断は、東区トレンチ2の様子を見て判断したい。また、終了前には、明日の天候も危惧し、降雨対策を行う。西区トレンチ2では、遺構面3としていくつかの足跡を検出した。明日、精査して足跡の状況や性格を確かめたい。西川課長来訪。

5月8日(木) 曇り時々雨

雨天のため作業中止。

5月9日(金) 晴れ

西区トレンチ1のSR301を完掘した。土層断面の観察・分層を行い、足場を組んで南側から撮影。その後、平面図作成に着手した。西区トレンチ2では、遺構面3の精査を実施し、いくつかの足跡を検出した。足跡は不規則で、歩行を読み取れるものは少ない。実測の際は、右・左足のわかるものは、出来るだけ記載した。

5月12日(月) 晴れ

西区トレンチ1完掘状況(西区調査終了状況)の撮影。西壁・南壁土層断面の分層・撮影を行った。実測用の水糸(T.P.+6.5m)・基準釘を設定したところで一時中断し、西区トレンチ2の遺構面3の足跡実測に移った。西区トレンチ2では足跡を完掘し、実測に着手。実測は1/20で行い、足跡左右は「L・R」で示し、方向はアルファベットの天地で表した。藤川氏来訪。



第9図 北区トレンチ3 機械掘削風景(北から)



第10図 北区トレンチ3 調査風景(北東から)



第11図 埋め戻し風景(南から)



第12図 調査終了後の状況(南東から)

5月13日（火）晴れ

西区トレンチ1の土層断面図の作成。西区トレンチ2の完掘状況の撮影後、土層断面の分層・撮影を行った。西区トレンチ1・2の堆積状況は、枝番が増えただけで、対応している。都市整備課矢野氏、西川課長来訪。

5月14日（水）曇りのち雨

西区トレンチ1の埋め戻しと反転掘削の準備。西区トレンチ2の土層断面図作成の続き。午後から、雨天のため作業中止。

5月15日（木）曇り時々雨

本日も小雨が降る中での作業となった。西区トレンチ2の埋め戻しと、東区トレンチ2の機械掘削を反転方式で行った。東区は盛土が厚いため、機械掘削高は、GL-1.2mである。また、調査区北域に、東西幅1.5m・南北幅7mのトレンチを2本併行に設定した(西側がトレンチ3、東側がトレンチ4)。

5月16日（金）曇りのち晴れ

東区トレンチ1・2の機械掘削。北区トレンチ3で足跡を2点検出した。トレンチ4では、4層包含層中から須恵器片、羽釜片を検出した。これらの遺物は、スケッチ図を作成した後、レベル値を測って取り上げた。

5月19日（月）曇りのち晴れ

昨夜の雨で、トレンチがプール状態になっており、朝一番で水の汲み出し作業を行った。トランシットにより、調査地平面図の追加実測。東区トレンチ1では、近現代の堆積層を取り除いた。トレンチ1は、西区と同様攪乱が著しく、上層の対応は困難である。トレンチ2では、西区と東区の境で、近世以降の土器だまりを検出した。藤川氏来訪。

5月20日（火）曇り一時雨

東区トレンチ1で、攪乱部の除去と、青灰色砂礫層の掘り下げ。東区トレンチ2では、青灰色砂礫層(古墳時代遺物包含層)の掘り下げ。湧水が著しく、側溝を掘って対処した。下位に、人頭大の礫が散見されることから、氾濫堆積層の可能性が高い。トレンチ4では、6層上面で精査をしたが、遺構は検出されなかった。西川課長来訪。

5月21日（水）晴れ

東区トレンチ1では、6層上面で自然流路(SR302)を検出した。西区で検出したSR301と同一面であり、両遺構とも氾濫時の流路と考えられる。5層中から須恵器の破片が出土した。トレンチ2・3の6層上面で精査したが、遺構は検出されなかった。

5月22日（木）晴れ

東区トレンチ1では、東端で落ち込みと土坑2基を検出し、検出状況は足場を組んで撮影した。トレンチ2では、北壁土層断面の分層・撮影を行った。竹村氏来訪。

5月23日（金）曇り

東区トレンチ1のSK301・302、SO301の平断面実測とレベル値測量を行った。東区トレンチ2では、北壁土層断面図の作成。西区トレンチ2では南壁を実測したが、東区は攪乱が著しかったため、このような措置を取った。

5月26日（月）曇り時々雨

東区トレンチ1の南壁土層断面図の作成。東区トレンチ2、北区トレンチ3・4の埋め戻し。本日で、全ての実測作業を完了した。

5月27日（火）晴れ

東区トレンチ1・2の埋め戻し。撤収の準備として土嚢袋の解体、道具の洗浄。図面整理と遺物台帳の作成。引越しの為の機材・遺物の梱包。

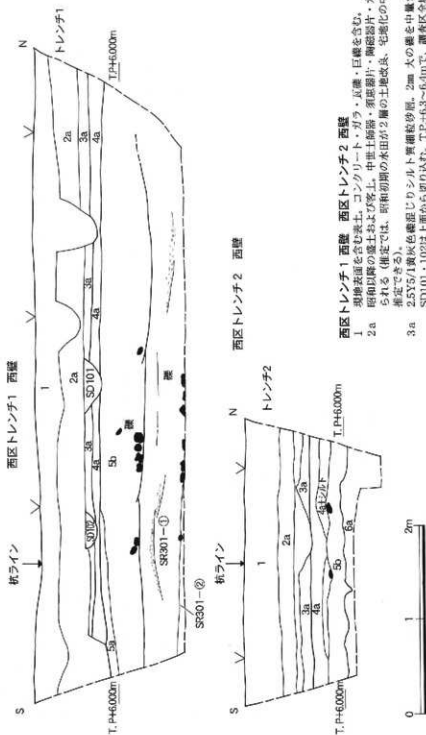
5月28日（水）晴れ

ネットフェンスの撤去と調査機材・道具の搬出。積水ハウス代理者、株式会社大地代理者、市教委の三者で終了立会を行った。内容として、今回の調査の概要と、現状復旧の方法についての取り扱いについて協議した。その後、三条整理事務所に場所を移し、整理作業に取りかかった。(坂田)

第2節 基本層序

土層番号は、現況地表面を含む表土（盛土・客土）層を第1層とし、上から順に通し番号でアラビア数字を付した。また、同一層と認められるものでも漸次変移しており、土色・土質に違いがあるものの、異なる複数の層をセット関係でとらえたものは、アルファベットの小文字を付してまとめた。色調は『新版標準土色帖2002年版』（農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修）を使用した。層序は、先行して調査した西区トレンチ1の西壁を基本層序とした。以下に、各層の土質・性格を記すとともに、出土遺物をもとに堆積時期を推察していきたい。

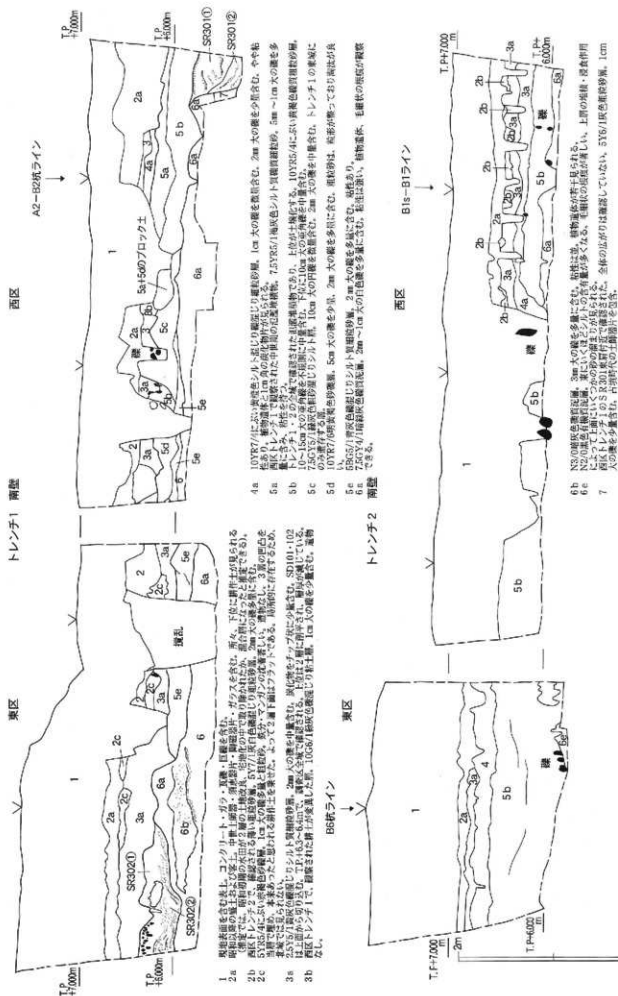
- 1層…現地表面を含む表土。コンクリート・ガラ・瓦礫・巨礫を含む。
- 2層…近現代の盛土層。3層に連続する耕作面があったと思われるが、当層によって大きく改変されている。北区トレンチ3・4では1層によって完全に削平されている。
 - 2a 昭和以降の盛土および客土。中世土師器・須恵器片・陶磁器片・ガラス片を含む。所々、下位に耕作土が見られる（推定では、昭和初期の水田が2層の土地改良、宅地化の中で取り除かれたか、混合層になったと推定できる）。
 - 2b 西区トレンチ2で、確認される薄い粗粒砂層。5Y7/1灰白色礫混じり粗粒砂層。2mm大の礫を多量に含む。
 - 2c 5YR5/4にぶい赤褐色砂礫層。1cm大の礫多量と粗粒砂。鉄分・マンガンの沈着が著しい。遺物なし。3層の凹凸を当層で埋め、本来あったと思われる耕作土を乗せた。よって2層下面はフラットである。局所的に存在するため、北域では見られない。
- 3層…下面が遺構面1。近現代の水田耕土層。当層は調査区全域で確認されているが、トレンチ1・2と、北区トレンチ3・4では、80cmの比高差があることから、未発掘部分で耕作地段差が形成されていたと推測される。
 - 3a 2.5Y5/1黄灰色礫混じりシルト質細粒砂層。2mm大の礫を中量含む。炭化物をチップ状に少量含む。SD101・102は上面から切り込む。T.P.+6.3～6.4mに存在する層で、調査区全域で確認される。上位は2層に削平され、層厚を減じている。
 - 3b 西区トレンチ1で、観察された耕土が変異した層。10G6/1緑灰色礫混じり粘土層。1cm大の礫を少量含む。遺物なし。
- 4層…下面が遺構面2。中世末～近世の耕作土層。当調査地点に限れば、水田開発は当層から始まっている。中世土師器・東播系須恵器・杯蓋片が出土している。
 - 4a 10YR7/4にぶい黄褐色シルト混じり礫混じり細粒砂層。1cm大の礫を微量含む。2mm大の礫を少量含む。やや粘性あり。植物遺体と1cm角の炭化物片が見られる。
 - 4b 北区トレンチ4で確認された。2.5Y7/4浅黄色礫混じり中粒砂層。炭化物を若干含む。3～5mm大の礫を中量含む。
- 5層…a～g層に細分できるが、基本的には古代～中世の津知川（東川）の氾濫堆積物であり、礫混じり中粒～粗粒砂で構成される。当地点の立地する津知川右岸の扇状地間低地には、当層に対応する洪水砂、氾濫堆積物が確認されている（第14～5・6地点、第17・157地点など）。出土遺物は、中世土師器とともに6世紀代の須恵器が頻出している。
 - 5a 西区トレンチ1で観察された中世段階の氾濫堆積物。7.5YR5/1褐色シルト質礫質細粒砂。5mm～1cm大の礫を多量に含み、粘性を持つ。
 - 5b トレンチ1・2の全域で確認された氾濫堆積物であり、上位が土壌化する。10YR5/4にぶい黄褐色礫質粗粒砂層。10～15cm大の亜角礫を不規則に中量含む。下位に10cm大の亜角礫を中量含む。



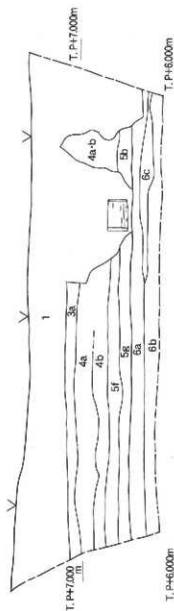
第13図 トレンチ1西壁・トレンチ2西壁土層断面図 (1/40)

西区トレンチ1西壁 西区トレンチ2西壁

- 1 現地表面を含む黄土、コンクリート・ガラ・灰渣・巨礫を含む、昭和以降の盛土および客土、中世土師器・須恵器片・陶器器片が見られる(推定では、昭和初期の水田が2層の土地改良、宅地化の中で取り除かれたか、混合層になったと推定できる)。
- 3a 25Y5/1黄灰色硬質じりシルト質細粒砂層。2mm 大の礫を中量含む。炭化物をチップ状に少量含む。SD101・102は上面から切り込む。T.P.+6.3~6.4mで、調査区全域で確認される。上位は2層に附平され、層厚が減じている。
- 4a 10YR7/4にぶい黄褐色シルト層じり硬質砂層。1cm 大の礫を微量含む。2mm 大の礫を少量含む。やや粘性あり。植物遺体と1cm 角の炭化物片が見られる。
- 5a 西区トレンチ1で観察された中世晩の肥後系土層。7.5YR5/1地灰色シルト質微細粒砂層。5mm~1cm 大の礫を多量に含み、粘性を持つ。
- 5b トレンチ1・2の全域で確認された肥後系土層であり、上位が土層化する。10YR5/4にぶい黄褐色微細粒砂層。10~15cm 大の重角礫を不規則に中量含む。下位に10cm 大の重角礫を中量含む。

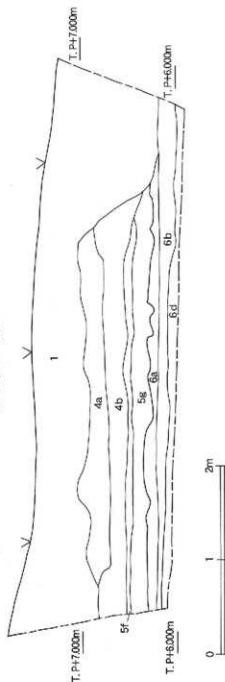


トレンチ 3 東壁



- 1 埋土断面を含む。コンクリート・ガコ・瓦礫・瓦礫を含む。
 3a 250cm厚の灰色凝結したシルトと重砂層。2m以上の層を含む。灰化物をチャップリンに多量含む。SD101・102は1層から切り込む。T.P.+63~64mで、灰化物を含む層で埋め込まれる。上位は2層に割れている。埋没が現れている。
 4a 10YR7/4に灰色凝結したシルトと重砂層。1cm以上の層を含む。灰化物をチャップリンに多量含む。砂粒は、埋没が現れている。
 4b 10YR7/4に灰色凝結したシルトと重砂層。1cm以上の層を含む。灰化物をチャップリンに多量含む。砂粒は、埋没が現れている。
 5f 10YR7/4に灰色凝結したシルトと重砂層。1cm以上の層を含む。灰化物をチャップリンに多量含む。砂粒は、埋没が現れている。
 5g 10YR7/4に灰色凝結したシルトと重砂層。1cm以上の層を含む。灰化物をチャップリンに多量含む。砂粒は、埋没が現れている。
 6a 10YR7/4に灰色凝結したシルトと重砂層。1cm以上の層を含む。灰化物をチャップリンに多量含む。砂粒は、埋没が現れている。
 6b 10YR7/4に灰色凝結したシルトと重砂層。1cm以上の層を含む。灰化物をチャップリンに多量含む。砂粒は、埋没が現れている。
 6c 10YR7/4に灰色凝結したシルトと重砂層。1cm以上の層を含む。灰化物をチャップリンに多量含む。砂粒は、埋没が現れている。
 6d 10YR7/4に灰色凝結したシルトと重砂層。1cm以上の層を含む。灰化物をチャップリンに多量含む。砂粒は、埋没が現れている。

トレンチ 4 東壁



第15図 トレンチ 3 東壁・トレンチ 4 東壁土層断面図 (1/40)

- 5c 7.5GY5/1緑灰色粗砂混じりシルト層。10cm大の円礫を微量含む。2mm大の礫を中量含む。トレンチ1の東域にのみ遺存する層。
- 5d 10YR7/6明黄褐色砂礫層。5cm大の礫を少量、2mm大の礫を多量に含む。粗粒砂は、粒形が整っており淘汰が良い。
- 5e 5BG5/1青灰色礫混じりシルト質細粒砂層。2mm大の礫を多量に含む。粘性あり。
- 5f 10YR5/1褐灰色礫混じりシルト混じり中粒砂。2mm以下の礫を少量含む。炭化物をドット状に含む。粘性あり。瓦器破片含む。
- 5g 5Y8/1灰白色砂礫層。2mm大の礫と粗粒砂。下位に細粒砂～シルトの薄層（層厚1cm）が観察される。
- 6層 上面が遺構面3。古墳時代～古代における自然流路のベース層である。トレンチ2では上面で足跡痕が多数検出されており、当層堆積時の環境としては泥濘地であったことが考えられる。さらに、津知川の氾濫時には分流路（SR301・302の様相を呈する自然流路）が幾筋も派生し、当地点もその氾濫流域内にあったと考えられる。当層からは、圈足円面硯や須恵器坏蓋が出土している。面的な調査での最深確認層。
- 6a 7.5GY4/1暗緑灰色礫質泥層。2mm～1cm大の白色礫を多量に含む。粘性は強い。植物遺体、毛細状の根痕が観察できる。
- 6b N3/0暗灰色礫質泥層。3mm大の礫を多量に含む。粘性は並。植物遺体が若干見られる。
- 6c 北区トレンチ3でのみ確認された。N6/0灰色礫質泥層。3mm大の礫を多量に含む。下位に粗砂の溜まりがある。
- 6d 北区トレンチ4でのみ確認された。5G2/1緑黒砂礫層。2mm以下の淘汰された礫と粗砂。湧水あり。
- 6e N2/0黒色有機質泥層。東にいくほどシルトの含有量が多くなる。毛細状の根痕が著しい。上層の堆積・浸食作用によって上面にいくつかの砂の溜まりが見られる。
- 7層…西区トレンチ1のSR301東肩付近で確認された。全体の広がりには確認していない。5Y6/1灰色粗粒砂層。1cm大の礫を少量含む。古墳時代の土師器片を包含。 (坂田)



第16図 西区トレンチ2西壁土層断面



第17図 東区トレンチ1調査風景

第3節 検出遺構

今回の調査では、古代から近世にわたる各時期の遺構を検出した。遺構検出にあたっては、サブトレンチと攪乱坑壁面によって人為的な痕跡や地形の変化が読み取れる面を精査した。なお、以下に記す遺構面の名称（数字）は精査回数を示さず、4つのトレンチ相互の面的・時期的対応を示すものとした。

遺構の種類は概ね、津知遺跡通有の耕作地に見られる犁溝など耕作関連遺構が中心であり、他に不定形土坑を検出した。またトレンチ1・2の最終調査面である遺構面3では、古代の自然流路と足跡痕を検出した。それぞれのトレンチで検出した遺構面の時期と層位を簡単にまとめると、以下になる。

トレンチ1—遺構面1は3層下面で検出し、近世以降に相当する。遺構面2は4層下面で検出し、中世末～近世に相当する。遺構面3は6層上面で検出し、古墳時代～古代（6世紀後半～7世紀）に相当する。

トレンチ2—遺構面1と遺構面3を検出した。

トレンチ3—遺構面3を検出した。

トレンチ4—遺構は検出されなかったが、中世の遺物包含層と、遺構面3の対応層（包含層）を確認した。

古代の地形は、北東から南西に向かって緩やかな傾斜を呈しており、遺構面3で検出した自然流路もほぼこれにならう流下方向を示している。トレンチ1とトレンチ4の6層上面レベルで計測すると、0.8m～1mの比高差を測り、勾配は4°前後である。中世に入ると当調査地点のような泥濘地帯においても耕作地化が進行し、段差を設けることによってフラットな可耕地を造成している。以下、遺構面ごとに詳細を述べる。

1) 遺構面1（第18図、図版1・2）

近世以降の遺構面である。トレンチ1・2の西区西半部（杭No.A1～A3、杭No.B1・B2間）で検出した。検出レベルはT.P.+6.3m前後で、3層下面に相当する。水田耕作に伴う遺構で、溝6条、ビット4基、土坑2基を検出した。これらは4層に達する深耕を確認したものであり、厳密な遺構構築面は3層機能時、いわば3層の中位から切り込んでいるものと判断する。

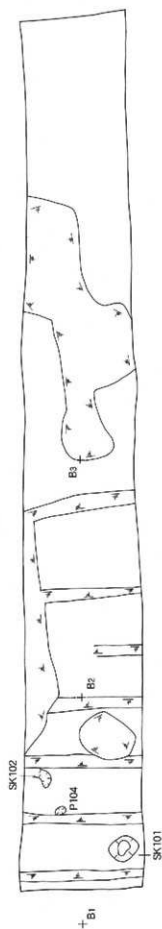
SD101・102は、東西に走向し、他の溝とは走向方向や埋土・規模で性格を異にする。当遺構のみ3層上面で検出し、最大幅30cm、深さ20cmを測る。両者とも断面形状は皿形を呈し、埋土には5mm大の礫と粗粒砂が埋積される。遺構の性格として、埋土の砂礫が流水堆積を示していることから、導水ないし排水目的の溝であったと判断する。SD101・102の内々間距離は1.5mを測る。遺物は、中世土師器細片が混入している。

SD103～106は、犁溝であり、いずれも南北方向に走向する。SD103～105の最大幅は15cm、SD106のみ幅20cmを超える。深さは、10cm未満である。埋土は単一層で、2.5Y6/1黄灰色礫混じり中粒砂で2mm大の礫を多く含む。遺構の性格として、先にも記したとおり、当遺構は深耕を検出したものであって、遺構の数よりも南北方向に走向していることが耕作手法を知るうえで重要となろう。ちなみに、走向方向はいずれも磁北から10°西偏している。

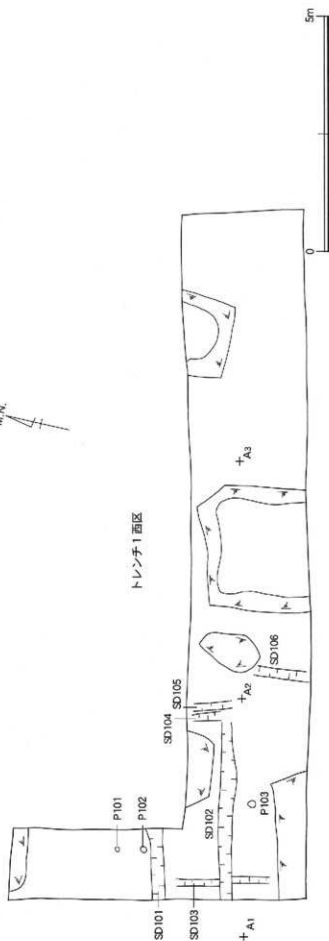
P101～104は、P101～103を杭No.A1～A2間で、P104を杭No.B1～B2間で検出した。平面形は、P101～103が15～20cmの正円で、P104が攪乱によって一部を破壊されているが、30cm前後の正円と推測される。深さはP101・102が20cmを測り、P103・104が6～10cmである。埋土は、いずれも2.5Y5/1黄灰色礫混じりシルト質細砂で、5mm大の礫が散見される。遺物は出土していない。

SK101・102は、杭No.B1～B2間で検出した。SK101は、東西60cm、南北70cmの隅丸方形を

トレンチ2西区



トレンチ1西区



第18図 遺構面 1 (1/80)

呈する。深さは10cmを測り、断面形は浅い皿形を呈する。埋土は10YR4/2灰黄褐色礫混じり粗粒砂で、2mm大の礫を少量とシルト質粘土のブロック土を含む。須恵器・土師器細片が出土している。SK102は、20cm×40cm以上の不定形を呈し、深さは5cmを測る。埋土は単一層で、10BG6/1青灰色礫混じり中粒砂で、2～5mm大の礫を少量と炭化物チップを微量に含む。遺構の性格は不明である。

遺構面の性格として、近世以降の水田にともなう耕作痕である。遺構面2の中世末～近世に相当する水田遺構と連続する遺構面である。トレンチ1・2の西端で顕著に見られるが、杭No.A2・B2以東や、北区トレンチ3・4では確認されなかった。また、基本層序で記したように、調査区内の3層のレベル差により、トレンチ内では検出されなかったが、北区とトレンチ2の間に耕作地段差が構築されているものと思われる。

2) 遺構面2（第19～22図、図版1）

中世末～近世の遺構面である。トレンチ1の西区西半部（杭No.A1～A2間）で検出した。検出レベルはT.P.+6.1m前後で、4層下面に相当する。水田耕作に伴う遺構で、犁溝1条、土坑2基を検出した。これらは5層に達する深耕を確認したものであり、実際は5層上面で検出している。

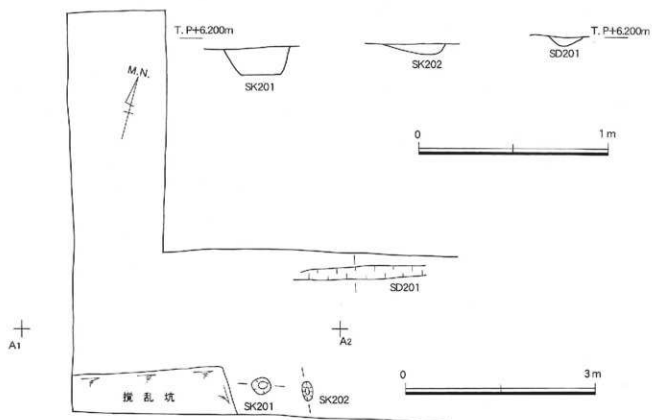
局所的に検出された理由として、次の二点が挙げられる。1. 犁溝が4層内に収まっていること。2. 検出面のベース層である5層が、礫混じり粗粒砂で構成される津知川の氾濫堆積物であるために、検出時に拾いきれなかった可能性が多分にあること。以下に各遺構の詳細を記す。

SD201は、杭No.A2の北で検出した。いわゆる犁溝で、東西方向に走向し、磁北から107°西偏する。検出幅は最大で25cmであり、残存長は2mを測る。深さは10cmで、断面形は浅い皿形を呈する。埋土は単一層で、10YR6/2灰黄褐色礫混じりシルト混じり粗粒砂で、2mm大の礫を中量含む。埋土から土師器の細片が1点出土した。

SK201・202は、杭No.A2の北東で検出した。SK201は、平面形35cmの隅丸方形を呈する。断面形は、深さ15cmの逆台形を呈し、底面から上外方に直線的に立ち上がる。埋土は、単一層で10G5/1緑灰色礫混じり粗粒砂で、2mm大の白色砂礫を中量と、5cm大の重角礫を微量に含む。SK202は、長径32cm、短径16cmの不整形な楕円形を呈する。断面形は、深さ6cmの浅い皿形を呈し、底部は若干北寄りに重心を持つ。埋土は、単一層で10Y5/1灰色礫混じり粗粒砂で、2～5mm大の礫を中量含む。遺構の性格として、SK201・202は東西に並列し、芯芯間距離は70cmを測るが、これら2基の関連性はつかめない。

遺構面の性格として、当調査地点における水田開発および可耕地化の初現と言える。ことわりとして、あくまでもこれは点的・線的な部分における初現であり、当遺構面形成以前は、津知川の氾濫時の流路、云わば逃げ水の通過点であったと思われる。つまり、津知川右岸では、当調査地点のような泥濘地帯を残しながら、他の地域では弥生時代から水田が始まっている。例えば800m南の第17地点では弥生時代終末～古墳時代の水田層を、900m南南東の第4地点では古墳時代の小区画水田が確認されている。同時に、中世期に入ると津知川の流路固定が徐々にではあるが行われ（竹村・山内2003、森岡・坂田2002）、これと相関して当地点のような不可耕地に水田が及んでくることとなったと思われる。

また、遺構面1と遺構面2とでは、犁溝の走向方位が明らかに変化している。遺構面1が磁北から10°西偏する南北軸に対して、遺構面2では磁北から107°西偏する東西軸である。当然、偶発的な結果であると推定するのに加えて、前・後者間で、作付け面積・作付け平面形の変化を推定することが可能であると思われる。今回の調査では、水田畦畔・段差は検出しておらずこれらの問題は、留保しておく。



第19図 遺構面2西区トレンチ1 (平面図1/60、断面図1/20)



第20図 SK201



第21図 SK202



第22図 SD201

3) 遺構面 3 (第23図、図版1・2)

古墳時代～古代の遺構面である。トレンチ1～4で確認できた。6層上面で検出し、検出レベルは、トレンチ1ではT.P.+5.7～6.0m、トレンチ3・4ではT.P.+6.1mを測る。検出した遺構は、自然流路2条(SR301・SR302)と足跡である。ベースとなる6層は、礫混じり有機質泥層で、調査区では北東から南西に緩やかな傾斜を持っている。自然流路(SR301)はこの傾斜にならって流下している。

また、調査区周辺ではこのような自然流路が葉脈状に幾筋も流下していると思われ、その一部分を検出したにすぎない。SR301の北肩(右岸)は、トレンチ2では明瞭な切込みを検出できず、土層断面から推定した。全体的なイメージでは第23図のようになろう。つまり、5層礫混じり中粒～粗粒砂の氾濫堆積物は、調査区全体に及んでおり、氾濫時の流域は今回調査区を呑み込むような幅を想定し、実際の流路はその範囲内を右に左に振っていたと考えられる。

SR301は、杭No.A2以西のトレンチ1西端部で検出した。検出したラインは流路の南肩(左岸)で、対する北肩はトレンチ外に相当する。南肩は北東から南西に切っており、検出面と底の比高差は、50～60cmを測る(第14図)。流路幅は推定で10mを測り、その中心ラインは、エレベーションから推測すると南肩から北西へ5m、トレンチ1の北に「L」字状に張り出した部分の北端辺りに推定される。底面は、緩やかに流路中心ラインに向けて傾斜している。流路内堆積土は、

①10YR7/6明黄褐色礫混じり粗粒砂。2cm大の中礫を中量含む。ラミナが観察できる。

②10BG7/1明青灰色礫混じり粗粒砂。下位に20cm大の垂角礫が散見できる。古墳時代の遺物を包含する。

の2層に分層できた。詳細に観察すると、より小単位の堆積過程が確認できた。左記の土層注記で示したとおり、当遺構は氾濫時の一過性の流路とは性格を異にし常時流水していたと考えられる。当流路からは、6世紀後半の須恵器坏(第25図、30～32)と、弥生時代後期～古墳時代初頭の壺ないし甕の底部片(第25図、34)が出土している。

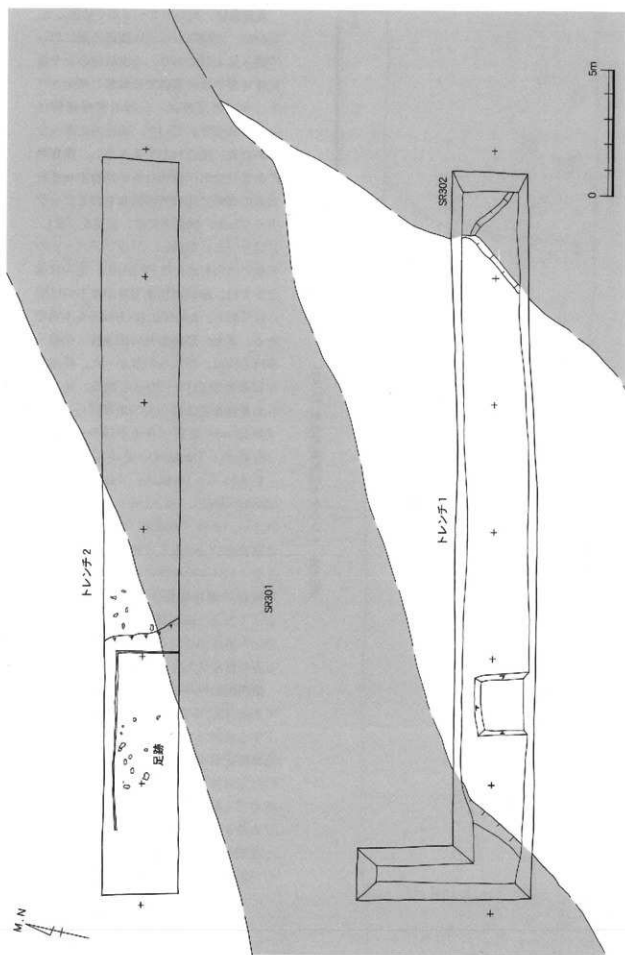
SR302は、杭No.A5以东のトレンチ1東端で検出した。検出したラインは流路の北肩(右岸)で、対する南肩はトレンチ外に相当する。北肩はSR301と同様、北東から南西に切っており、検出面と底の比高差は、40～50cmを測る。流路底面は二段落ちになっており、その比高差は、10～15cmを測る。流路内堆積土は、

①5Y8/1灰白色シルト混じり礫混じり中粒砂層。東端で5cm大の垂角礫が顕著に見られる。中位に層厚3cm程度のシルトの帯層が見られる。

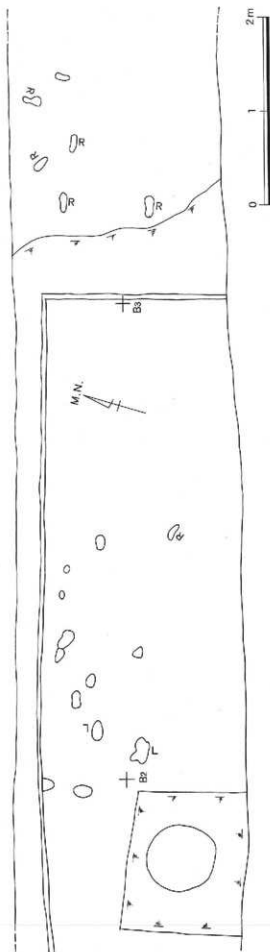
②7.5Y7/1灰白色砂礫層。3mm大の礫を含む。粗～中粒砂。西肩は細粒砂のラミナが、東～中央は粗粒砂のラミナが観察される。

の2層に分層できた。これら土層断面の観察から、埋積過程において①・②層で流下速度に違いがあったか、もしくは洪水による逆炭化が生じていると思われる。当遺構に関しては、常時流水があったか、一過性の流路かの判断は出来なかった。ただし、遺構検出ラインから想定したように調査地北東域でSR301とSR302が分流すると思われる。当流路からは、庄内期の高坏脚柱部(第25図、23)が出土している。

(坂田)



第23図 遺構面 3 (1/150)



第24図 トレンチ2足跡検出状況 (1/40)

足跡痕は、杭No.B 2～4間で検出した。足跡は、流路際もしくは流路浅瀬において踏み込まれており、当遺構面のような泥濘地帯や水田遺構では頻繁に検出される。今回の足跡は、5層氾濫堆積物によって充填されていた。流路内にあったものは洗い流されたであろうし、調査時にあまりにも不鮮明なものは検出せず担当者の判断で比較的明瞭なものをピックアップした。図面上では、右足を「R」、左足を「L」で示し、アルファベットの天地で方向を表した(第24図)。遺存状態としては、指の形状まで分かるものは限られており、大半が左右・方向とも不明である。また、足跡相互の関連性・歩幅・歩行方向は、捉えられなかった。検出残存足長は概ね17～20cmを測る。足長からの身長推定法はいくつか挙げられる。
『身長(cm)=足長×6+2(30-足長)』(庭瀬法)、『身長(cm)=足長×6+2(30-足長)+3』(石橋法)、『身長=足長×6.954』(椿法)、『身長(cm)=足長×3.78+70.11』(小林・岡田法)などがあり、仮に足長を18.5cmとして庭瀬法に代入してみると134cmの身長になる。これらは、足跡痕の遺存状態や足長の計測基準によって大きく値が変化するが、該期の人骨から導き出される値と比較してもさほど違和感を覚えない。

遺構面の性格として、当調査区は本流である津知川の氾濫・洪水ごとに水が流下する流域であり、中世段階に津知川の流路固定が手懸けられる前のあえて残された未可耕地であったと考えられる。その中で、足跡痕が見られたり、ベース層である6層から圈足円面視が出土したりと該期の人々の生活痕跡を垣間見ることが可能である。

(坂田)

第4節 出土遺物

今回出土した遺物は、機械掘削から7層までを含めトータルで28ℓコンテナ3箱を数える。

所属時期は、古墳時代から近世期にわたる。レイアウトはトレンチごとに分け、その中で遺構および層単位で並べた。実測は、可能な限り図化・復元するように努めた。また、図化していないものでも極力図版に載せるよう心掛け、巻末図版には出土層位を記載した。なお、古墳時代から古代の須恵器に関して文中で「Ⅱ-6段階」「Ⅲ-1段階」のように表記するものは、特にことわりがない限りは中村編年〔中村2001〕を用いている。

①トレンチ1出土遺物（第25図、図版3～5）

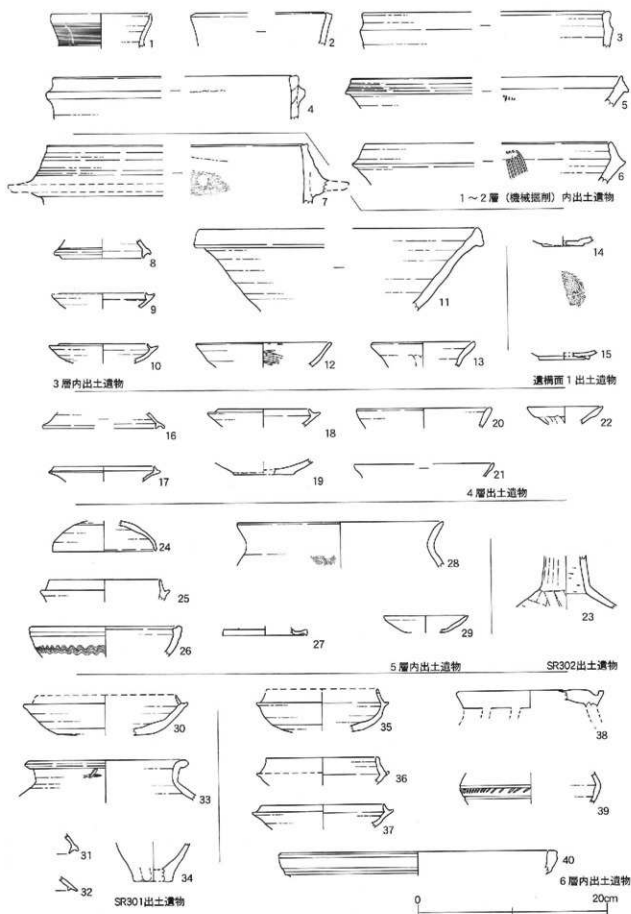
1～2層（機械掘削）内出土遺物 当層からは古墳時代～近現代におよぶ。近現代の土地造成により過去の遺物が混入したものとする。1は、須恵器壺の口縁部で口径10.6cmを測る。頸部から上外方にたちあがり、端部はほぼ垂直に仕上げられる。外面調整は、丁寧なカキ目が施される。焼成は良好で、胎土に1mm以下の黒色・白色粒を若干含む。6世紀代の遺物で、本来は当地区5・6層に帰属する遺物と考えられる。2は、近現代の陶器である。器種・口径は不明である。色調は内面がにぶい赤褐色、外面がオリブ灰色を呈する。3・4は、ともに煮沸形態の土器で土師質の土壌である。3は、口縁部外面の端部直下に凹みを持ち、端部は丸く収める。焼成は良好で、胎土に1mm大の石英・長石・シャモット・黒色粒を含む。4は、口縁部外面に断面台形の突帯を施す。破断面および内面に粘土紐の接合痕が観察できる。14世紀代の遺物である。5・6は、備前焼のすり鉢である。色調は、明赤褐色～褐色を呈し、焼成は良好である。6は口縁端部の肥厚が著しく、14世紀後葉～15世紀前葉に相当する。スリ目は、6本／一単位(2cm)である。残存率が低く使用頻度は不明である。

3層内出土遺物 中・近世の遺物のほかに古墳時代に遡る遺物が混入している。遺物は耕作面から出土したため比較的細かい破片が多い。7は、瓦質の羽釜である。口縁端部は面を持ち、鋤部先端は欠損しているが、鋤部径はおそらく40cm弱であろう。外面調整は、鋤部下端以下は板ないしへら状工具によるタテ方向のケズリ、内面は細かいハケメを施す。15世紀代に比定される。8・9・10は須恵器坏で、いずれも焼成は良好で胎土は精緻である。Ⅱ-6～Ⅲ-1の段階に比定される。11は、東播系須恵器片口鉢である。内外面ともに灰白色を呈し、焼成は良好である。口縁端部の肥厚に発達しており、形態から森田編年Ⅱ期2段階に相当する。12は、瓦器碗である。口縁端部は丸くおさめ、内面調整は粗いミガキ圏線が見られる。胎土に1mm以下の白色砂粒を微量に含むが、全体的には精緻である。尾上編年Ⅲ-1期に相当する。13は、土師器皿である。細片であるため、口径・傾きは推定である。体部外面中にユビオサエが見られる。おそらく体部がラッパ状に開く15世紀代のものと思われる。

遺構面1出土遺物 14は、東播系須恵器の埴底部で、外底面に回転糸きり痕が観察できる。底部から体部へのたちあがりから、11世紀末から12世紀前半に比定される。15は、瓦器埴の底部で、貼り付け高台は退化傾向にある。ローリングが著しく、調整は不明瞭である。

4層内出土遺物 3層に比べ中世の遺物が頻出する。16～18は古墳時代の須恵器坏類で、坏口か坏Gのどちらかである。いずれも焼成は良好で胎土は精緻である。色調は16のみ灰黄色を呈し、他は明青灰色である。19・20は、東播系須恵器の碗である。19は外底面に回転糸きり痕が観察できる。20は口縁端部がやや肥厚し、外面に重ね焼きによる焼きムラが確認できる。21は、瓦器碗である。口縁残存部がヨコナデにより直線化しており口径復元が出来なかった。22は、土師器皿である。色調は褐色を呈する。内外面ともに煤の付着が見られ、15世紀代の灯明皿であろう。

5層内出土遺物 当層からは古墳時代の遺物が出土した。29に関しては、取り上げ時の混入と考えたい。24・25は須恵器坏蓋で、どちらも焼成良好で、胎土は精緻である。Ⅱ-5・6に比定される。26は壺の口縁部で、頸部に波状文の加飾が見られる。口縁部は内湾しながらたちあがり、端部はやや肥



第25図 出土遺物実測図 (1/4)

厚する。27は、須恵器高杯の脚部である。裾部径は9cmを測る。28は、土師器長胴甕の口縁部である。口径は推定で22cmを測る。頸部はゆるく屈曲し、端部は丸くおさめる。外面はタテ方向のハケメ(7本/cm)が施される。29は土師器皿で、口縁部に1段のヨコナデを施す。色調はにぶい橙色を呈する。

S R 301出土遺物 30～33が須恵器で、34は弥生土器の底部である。30は坏身で、器壁は厚めであり、ぼつてりした印象を受ける。これまでに出土している坏の中では、古手のものとなる。Ⅱ-3段階に相当する。31・32は杯蓋で、かえりが受け部のラインより内に入る。両者とも細片である。33は、須恵器の壺である。口縁部は頸部から短くちあがり、端部は外反しながら玉縁状におさめる。口頸部にヘラ記号と思われる焼成前の線刻が見られる。34は、弥生土器の鉢か壺の底部である。底径は4.1cmを測る。底部付近に指おさえの痕跡がみられる。

S R 302出土遺物 当遺構からは高杯の脚柱部が出土した。柱状部径は、裾部との接点で5.2cmを測る。外面調整はタテ方向の板ナデのあと、柱状部・裾部の変化点付近にヨコナデを施す。内面調整は、ヘラケズリである。庄内期に比定される。

6層内出土遺物 35～37は、須恵器坏身である。35・36は、Ⅱ-2・3段階に比定される。38は、圈足円面硯である。硯面部径は15.6cmを測り、墨を溜める池の部分は7mmの深さを持つ。磨墨面は使用による磨耗から中央がやや窪む。7世紀代のもと思われる。39は、須恵器壺の体部である。上下2条の沈線回らせ、その間にナメ方向の刺突文を施す。体部上位に灰かぶりが見られる。40は、須恵器の大型甕の口縁端部である。6～7世紀頃のものともみてよい。

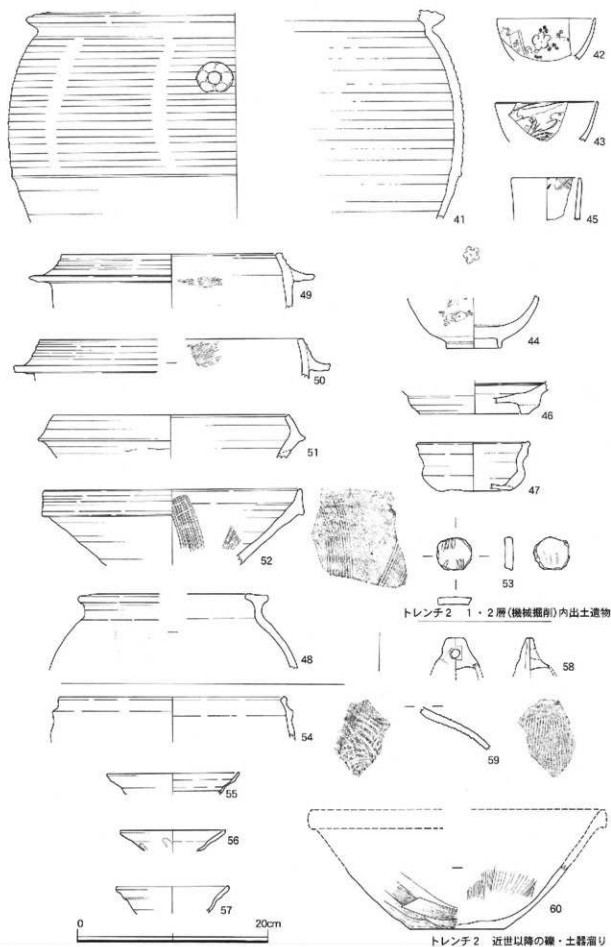
②トレンチ2出土遺物(第26図、図版5～8)

1～2層(機械掘削)内出土遺物 41～48は、近現代の陶磁器である。41は、大型の貯蔵甕である。胴部径は50cm弱である。色調は褐色を呈し、施軸されている。42～45は染付け碗である。いずれも18世紀中葉～後半に相当する。44は、見込みにコンニャク印判による五弁花文を施す。46は備前焼、47は丹波焼の鉢、48は丹波焼の壺と思われる。49・50は、瓦質羽釜である。49は、口径23.4cmを測る。体部外面調整は鋸部下端から板状工具によるケズリが施される。内面調整は、細かいヨコハケが施される。体部外面下位には煤の付着が見られる。51・52は、備前焼のすり鉢である。色調は、灰白色～明赤褐色を呈する。51は、体部外面に粘土紐の接合痕が見られる。52の内面スリ目は、1単位9本である。51が15世紀後葉、52が15世紀中葉であろう。53は、須恵器片の加工円盤である。長径3.7cm、短径3.4cm、厚さ0.7cmを測る。破断面の観察から意図的に円形に打ち欠いていることが推測される。子供の玩具であろうか。

近世以降の礫・土器だまり出土遺物 54は、土師質の土塊である。口径は24cmを測り、色調はにぶい黄褐色を呈する。使用の痕跡は見られない。第25図3と類似する形態である。55～57は、土師器皿である。色調はいずれも灰黄色を呈する。反転復元のため大・小皿の記述は避けるが、15～16世紀代のもと思われる。58は須恵器イイダコ壺で、紐通し穴の部分のみ遺存していた。紐孔は、摩滅しておらず、使用される前に投棄されたと思われる。59は、須恵器甕の体部片である。外面調整は、タタキのあとカキメを施す。内面調整は、同心円状のあて具痕が観察できる。60は、須恵器捏ね鉢の底部である。内底面から放射状にハケメ(6本/cm)が施される。内面は使用による磨耗が著しい。

遺構面1出土遺物 81は、須恵器坏身である。口径は、11.2cmを測る。ちあがり、短く内傾し、端部は尖る。Ⅱ-5・6段階に比定される。82は、煮沸形態の土器の把手である。おそらく埴ないし甑と思われる。胎土に2mm大の長石・石英・角閃石を多く含む。外面にユビオサエが見られる。

3～4層内出土遺物 トレンチ2では、攪乱による汚染のため、厳密な3・4層の分層取り上げが出来なかった。また、トレンチ2の3・4層遺存箇所は西端と東端のみで、中央部(杭ⅢB2～4間)は削平されていた。そのため、当層の出土遺物総数はトレンチ1と比較して少ない。61～64は、須恵



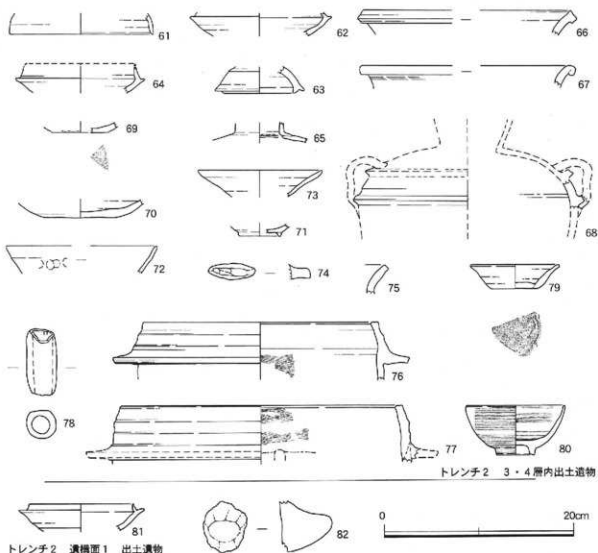
第26図 出土遺物実測図 (1/4)

器坏身・蓋である。

61は口径15.4cmを測り、焼成は良好で胎土には2mm以下の白色砂粒を若干含む。Ⅱ-6段階に相当する。62は口縁部が欠損している。焼成は良好で胎土は緻密である。Ⅱ-5段階に相当する。63は口径7.2cm、器壁は厚さ7mmを測る。やや焼きひずみが見られる。長頸壺の64はたちあがりが発達しており、これまで見てきたものより古での様相を呈する。灰白色を呈し、焼成は良好である。Ⅱ-2・3段階に相当する。65は、須恵器長頸壺の頸部である。体部と口縁部を別々に製作し、クロ口上で接合されたことが分かる。66・67は、須恵器甕の口縁部である。66は頸部からやや外反しながら端部に至る。端部は外側に角を持って肥厚し、端面は1cmを測る。67は口縁端部を外巻きに丸くおさめ玉縁状を呈する。口縁部外面は、カキメ調整が施され、その後回転ナデによって消されている部分が目立つ。68は、双耳壺の把手接合部分と思われる。体部中位に2条の断面台形突帯を巡らし、その上下に把手を渡らせる。焼成は良好で胎土は緻密である。10世紀代の所産であろう。69は、東播系須恵器の埴底部である。底部切り離しは、回転糸切りである。森田編年Ⅰ期2段階に相当する。11世紀末～12世紀前半の所産である。

70は、土師質土器の底部である。底径は8.4cmを測る。色調は浅黄色～灰黄色を呈し、焼成はやや軟質である。胎土に2mm大の石英・長石を含む。71は、黒色土器の埴底部である。高台は貼り付け高台である。高台径は、4.4cmを測る。ローリングが著しく、器面は胎土色が露呈しており内黒・両黒、調整はともに不明瞭である。72は、瓦器埴である。破片が小さく口径・傾きは不明である。器形は、直線的にたちあがり、端部は丸くおさめる。体部外面にユビオサエが見られる。おそらく尾上編年Ⅲ-3以降、13世紀中頃以降の所産であろう。73は、土師器の皿である。体部がラッパ状に開く15世紀代のものである。74は、煮沸形態の土器の把手である。手づくねで作成されている。75は、土師器甕の口縁部である。色調は浅黄褐色を呈し、胎土に2mm以下の石英・長石・シャモットを少量含む。残存率が低く、回転復元はしていない。76・77は、羽釜である。76は、口径25cm、鈎部径31.4cmを測る。口縁部は段を持ち、内傾しながら立ち上がる。鈎部は退化しておらず、ほぼ水平方向に広がっている。体部外面調整・成形は、鈎部下端から板ナデおよびケズリ調整を施す。内面調整は、細かいヨコハケの後、粗いナメハケが施される。15世紀代のものと思われる。77は、口縁部がほぼ垂直にたちあがり、端部付近で若干内傾する。内面調整は、ハケメ(7本/cm)を乱雑に施す。鈎部接合部位内面には、ユビオサエ痕が顕著に見られる。また、内面には炭化物が付着している。78は、管状土鍾である。長さ6.9cm、幅3.2cm、紐通し孔径1.9cm、重さ64.4gを測る。色調は、灰黄褐色を呈する。紐通し孔は、正円で棒などに巻きつけて複数個同時に製作していると思われる。また、紐通し孔の欠損部は、紐づれの磨耗ではないことを指摘しておく。79は、備前焼の小皿である。口径9.6cm、器高は2.6cmを測る。底部切り離しは、回転糸切りである。色調は外面褐灰色を呈し、やや光沢を持つ。15世紀代の所産であろう。80は、唐津焼の碗である。いわゆる刷毛目唐津と称されるものである。口径10.6cm、高台径4.0cm、高さ5.2cmを測る。内底面に蛇の目輪割が見られる。

5層内出土遺物 トレンチ1と同様に、古墳時代の須恵器が頻出する。83～85は、須恵器坏蓋である。83は、天井部境界に弱い稜線が看取でき、直線的に端部に至る。口縁端部は、弱い凹面に仕上げられる。外内面とも灰白色を呈し、焼成は良好で胎土は緻密である。84は、明確な稜線から内湾ぎみに端部に至る。口縁端部は、面を持つ。83・84ともにⅡ-1段階に比定される。85は、比較的扁平で、口径は12.2cmを測る。稜は退化傾向にあり、83・84に比べ後出するものである。胎土に1mm以下の白色粒を若干含む。86～92は、須恵器坏身である。86は、たちあがり顕著で、ほぼ垂直に立ち上がる。回転ヘラケズリは体部中位まで施され、シャープな仕上げがなされている。Ⅰ-3・4段階に比定される。87は、丸みを帯びた土器であり、回転ヘラケズリは体部下位までで、中位からは丁寧な回転ナデ

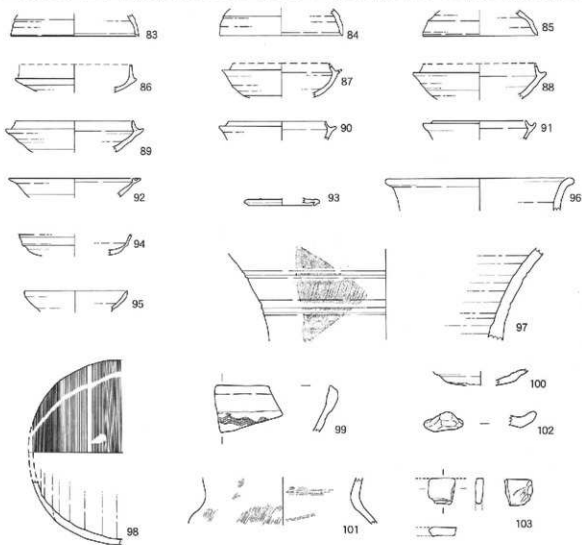


第27図 出土遺物実測図 (1/4)

が施される。88は、やや厚めの器壁を持ち、回転ヘラケズリと回転ナデの変化点は、体部中位で観察できる。胎土に2mm以下の白色粒・黒色粒を若干含む。II-3段階に比定される。89は口径12.6cmを測り、口縁端部はやや尖りぎみにおさめる。回転ヘラケズリと回転ナデの変化点は、体部下位で観察できる。90は口径11.4cmを測り、たちあがりは内傾しながら短く立ち上がる。91は、器壁が薄くシャープな作りである。91・92は蓋の可能性もある。92は、口縁端部ラインと受け部ラインがほぼ同じ高さにおさまる。身と蓋の判断に窮する時期のものである。93は、須恵器高環の脚部である。樹端部は内側に折り返し、やや扁平な形状をなす。94は、須恵器無蓋高環の坏部である。口径は12.0cmを測り、器壁が薄くシャープな作りである。強い回転ナデによって体部から口縁部にかけて段をなす。95は、須恵器壺の口縁部である。頸部から上外方に立ち上がり、端部は尖りぎみにおさめる。内外面ともに灰白色を呈し、焼成は良好である。96は、須恵器甕の口縁部である。口径は20cmを測る。頸部から外反しながら短く立ち上がり、端部でさらに外に広がる。端部形態は、玉縁状を呈する。97は、須恵器大型甕の口縁部である。外面調整は、残存部では上から波状文・凹線文2条・簾状文・凹線文2条を施す。焼成は良好で、よく焼き締まる。98は、須恵器横瓶の体部片である。扁球状を呈し、外面調整は繊細なカキメを施す。残存部高は、19.4cmを測る。99は、須恵器甕ないしは壺の口縁部である。口縁端部は肥厚し端面を持つ。外面調整は、ヨコナデの下端から波状文を施す。色調は灰白色を呈し、焼成は良好である。100は、土師器皿ないしは埴の底部である。底径は5cm前後を測る。底面

に糸切り痕が見られるが、胎土が付着しており隠れている。比較的雑な作りである。101は、土師器製の頸部である。頸部径16.3cmを測り、肩部から「く」の字状に口縁部へとつながる。外面調整は、縦方向のハケメ（8本/cm）が頸部から施され、ヨコナデによって屈曲部は消されている。102は、土師質土器の把手である。平面形が三角の舌状を呈する。色調は、浅黄色を呈し、胎土に1mm大の長石・石英・シャモットを含む。103は、砥石と思われる。厚さ8mmを測る。

6層内出土遺物 104・105は須恵器の身と蓋である。104は、口径11.6cmを測る。焼成は良好で、胎土は白色粒・黒色粒を若干含む。Ⅲ-1に比定されよう。105は、蓋とも身とも考えられる時期のものである。口径は10cm前後を測り、たちあがりは退化傾向にある。Ⅱ-6およびⅢ-1段階に比定される。106は、東播系須恵器のこね鉢である。口縁端部は、肥厚し端面を持つ。森田編年第Ⅱ期2段階、12世紀末から13世紀初頭に比定される。取り上げ時の混入と思われる。107は、土師質土器の口

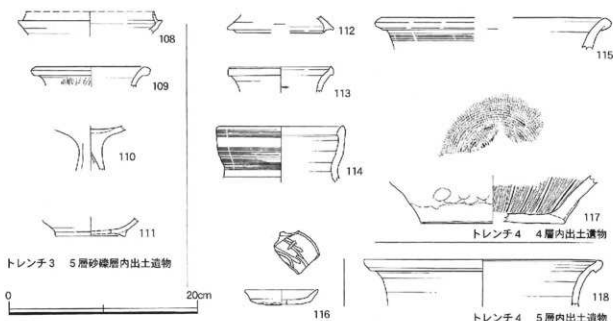


5層内出土遺物



6層内出土遺物

第28図 出土遺物実測図 (1/4)



第29図 出土遺物実測図 (1/4)

縁部である。細片であるため口径の傾きは任意に作成した。色調はにぶい黄橙色を呈し、胎土に1mm以下の微細な白色砂粒を中量含む。外面調整は、板状工具ないしヘラによる成形のあとヨコナデを施す。

③トレンチ3出土遺物(第29図、図版8)

5層内出土遺物 108は、須恵器坏身である。たちあがりは内傾しながら1.5cmほど立ち上がる。色調は灰白色を呈し、焼成は良好である。胎土に1mm以下の白色・赤色粒を若干含む。Ⅱ-4・5段階に比定される。109は、須恵器甕の口縁部である。頸部から外反しながら端部に至り、端部成形は丸くおさめる。口径は12.6cmを測る。口縁部外面調整はジグザグに浅い線刻を、その後ヨコナデが施される。色調は灰白色を呈し、焼成は良好である。110は、土師器の高坏脚柱状部である。柱状部内面にシボリ目が観察できる。坏部内底面は、薄い円盤充填が行われている。色調はにぶい黄橙色を呈し、焼成は良好である。胎土は0.5mm以下の長石・雲母を微量含む。庄内期の所産であろう。111は、土師器碗の底部である。貼り付け高台は断面三角形を呈し、高台径は7.6cmを測る。色調は内外面ともに橙色を呈する。古備型の碗と思われる。

④トレンチ4出土遺物(第29図、図版8)

4層内出土遺物 112は、須恵器坏蓋である。かえりは短く内傾する。色調は灰白色を呈する。113は、須恵器壺の口縁部である。頸部から外反しながら立ち上がり、端部は肥厚する。端面には、ヨコナデ時に付いたと思われるにぶい沈線が見られる。内面には、焼成時の気泡の破裂と思われるキズが見受けられる。焼成はやや軟質に焼き上げられている。114は、須恵器直口壺の口縁部である。頸部からやや内弯気味に立ち上がり、端部は内折する。口縁部外面中位には、2条の凹線を巡らせ、回転ナデにより丁寧に仕上げられる。115は、須恵器甕の口縁部である。口縁端部は、外折して丸くおさめる。外面はカキ目調整で仕上げられる。116は、瓦器皿である。口径は7.6cm、器高は1.5cmを測る。炭素吸着は良好で、胎土も0.5mm以下の白色・黒色粒を微量に含むものの、淘汰された良質の生地を使用している。内面調整は、見込みめに曲線的な暗文を施し、目線ヘラミガキはやや粗雑に施す。外底面はユビオサエが看取できる。117は、明石焼のすり鉢と思われる。色調は褐灰色～橙色を呈する。すり目は時計回りに施され、内底面には底径に沿う様にすり目と同単位の櫛で円周線を描く。

5層内出土遺物 118は、須恵器甕の口縁部である。頸部から外反しながら立ち上がり端部に至る。色調は内外面ともに灰色を、断面芯部は赤灰色を呈する。胎土に白色・黒色粒を微量含む。(坂田)

第5節 小 結

今回の調査では、古墳時代から近現代に至る遺跡の様相の一端を垣間見ることができた。すなわち、3面の遺構検出において、住居跡や墓など単体として性格が位置づけられる遺構は検出されなかったが、検出された水田や自然流路は周辺の既往調査との複合的理解を通して、遺跡内での当地点の機能的役割を認識させてくれたと考える。以下に、各遺構面と出土遺物を合わせ簡単にまとめる。

遺構面1 近世以降の水田跡である。検出された遺構は、排水（導水）路・犁溝・ビット・土坑などがある。中世から連続する耕作土層であり、層自体に厳密な時期設定を加えることは困難である。当遺構面および3層出土遺物を概観すると、近世遺物の他に中世や古墳時代の遺物を見ることができる。

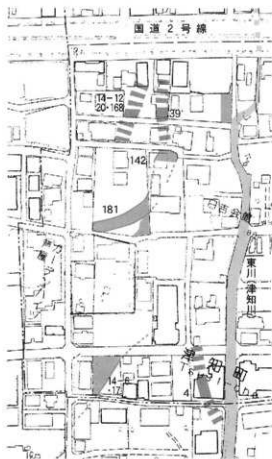
津知遺跡では、第17地点で検出された弥生時代終末期の水田をはじめとして、中世以降、第二次世界大戦後の宅地開発の波が押し寄せるまで連続と水田地帯が広がっていたことが解かっている（たとえば、橋本1971、清水 編1995など）。

遺構面2 中世末から近世の水田跡である。検出された遺構は、犁溝・土坑がある。時期について中世末を上限としたのは、出土遺物の頻出度と前後層の対応関係からの推測であって、出土している遺物の中には古墳時代の須恵器も少なからず出土している。

耕作土の形成過程をシュミレーションしてみると、ほぼ長期にわたる放置期間や洪水などによる放棄でもない限り、連続した耕土層に時期細分を施すのは困難である。たとえば、当地点4層（耕土層）機能時の上面は、3層（耕土層）機能時に改変されており、最終過程での見かけ上の上下面を捉えているにすぎない。当然、包摂される遺物も二次ないし三次移動の結果、比較的幅広い時期の遺物が出土する。

推測の域は出ないが、当遺構面が中世前半から機能していたと考えることも可能であり、結果的に中世前半の耕土層を中世末～近世の耕土層（4層）が踏襲し、改変したとも考えられる。

遺構面3 古墳時代～古代の自然流路と足跡である。繰り返すが、巨視的に見れば調査地全体が氾濫原であり、その範囲内で今回検出された自然流路や氾濫堆積物（5層）が構築・堆積している。また、円面硯の出土は、今日までに指摘されている律令期以降の葦屋敷や官衙の所在推定において、第2地点の建物群・銭貨・墨書土器・軒先瓦や第4地点で出土した墨書土器（東播系須恵器境の外底面）とともに重要な遺物であろう。（坂田）



第30図 東川右岸の自然流路
（弥生時代～古代末）

第3章 ま と め

1) 古代津知遺跡西限部の様相について—東川右岸の自然流路

古代における東川右岸域・左岸域の様相はすでに指摘されているところであるが〔辻2003、竹村・山内2003、森岡2004〕、本稿では右岸域に限定した上で、50地点を超える調査結果から該期の自然流路を抽出・図化した(第30図)、環境に規制される土地での機能的役割について考察してみたい。また、第30図に「弥生時代～古代末」と比較的時間幅を持たせたことは、第142地点に見られる様に古墳時代初頃から中世までほぼ同位置を踏襲した複数の流路があり、細分が困難であったことがあげられる。第4地点を除く他の流路は、北東から南西の流下方向を示しており、現在の東川用水付近から葉脈状に派生していたことがうかがえる。これは、上流に所在する芦屋廃寺遺跡、寺田遺跡、六条遺跡と比べ、当遺跡が沖積低地という緩傾斜面上に立地しており、〔辻ほか2003〕が指摘する流路帯と称される河道の枝葉化に相当する。

では、上記の環境下のもとどのような土地利用が為されていたのか。たとえば右岸南域の第4地点では、古墳時代の小区画水田が古代の自然流路に切られていたり、第17地点では弥生時代終末から平安時代まで5枚の水田面の間層に洪水砂が介在している。このことから、古代末以降に東川の流路固定が始まるまでは〔竹村・山内2003、森岡・坂田2002〕、流路帯および洪水・氾濫に対して受動的な立場に身を置きながらも、限られた可耕地を選択し、水田を営んでいたことが推測される。今後の課題として、棚田に代表されるような立地環境に適応した形態、すなわち流路間の不定区画水田の面的な把握が挙げられよう。近世以降における東川用水の歴史的背景については、先学の功〔森岡・竹村・古川編1999など〕に委ね全く触れなかった。

(坂田)

2) 中・近世の津知遺跡と津知村の成立状況

精道村成立以前の近世四ヶ村の一つである津知村は、これまでに多くの興味深い地名考証があつて、中世や古代に遡る集落が発展したものである。その歴史の変遷の素描については〔森岡2004〕で果たす予定であるが、今回の調査地点が大字「津知」小字「才道」のほぼ中央に位置することが確認でき、東西を走る西国街道と南北を貫く津知街道の交差する「四辻」の南西側の一角に当たる。19世紀後半(1884～86年)の2万分の1仮製地形図を一瞥すれば、明治時代には津知村の中心居住区であることが判然とし、中世以前の集落遺構の存在も予想されたが、発掘の結果は、古代以降、流路から耕作地に至る流れが追えるのみであった。このことから、中・近世の間においてこの村の変遷にながしかの断絶があつたとみられる。この点については、今後解決していく所存である。

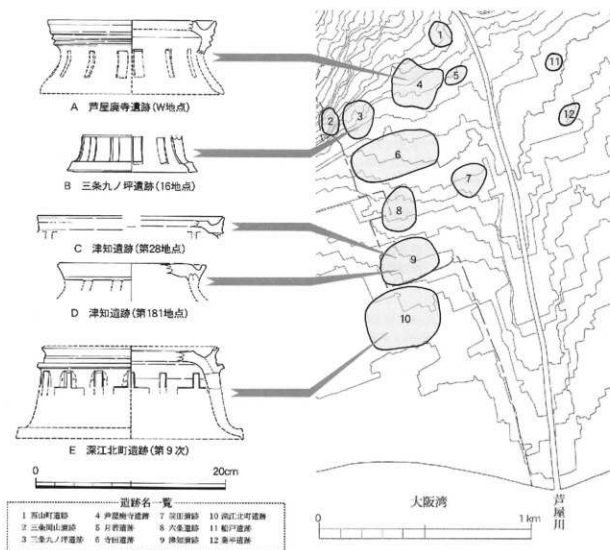
(森岡)

3) 円面硯の出土と芦屋川水系古代遺跡にみられる陶製硯について

第181地点の発掘調査では、トレンチ1第6層より圓足円面硯の破片が1点出土した(第25図38)。硯面部径15.6cmに幅0.7cmの海部、幅0.6cmの縁部が付く。小片であるため、細部の特徴を説明できないが、官衙的性格を各所で帯びる津知遺跡では第2地点において出土例があり(未報告)、第28地点からも報告例がみられる〔竹村・山内編2003〕。本遺跡第28地点出土例は、第3層検出の縁部片で、全容はほとんど知り得ない。

当時、硯は木簡や墨書土器と並んで数少ない識字層の往来を示すものであり、出土遺跡も限られた存在である。ちなみに第31図は、本市域西部の芦屋川水系の飛鳥・奈良・平安時代の遺跡の分布図に陶製硯の出土例をプロットしたものだが、阪神地方にあっては密度高く存在する地域の一つであることが知られる。次にそれらを概観し、向後の調査・研究に備えたい。

芦屋廃寺遺跡(W地点)の圓足円面硯(第31図A)は、海・縁部と透かし上部までがかるうじて残る破片である。陸と海の区別は明瞭で、硯面部幅13.6cm、海部幅2.0cmを測る。圓足上端には2条の



第31図 芦屋川水系の古代遺跡と円面碗の出土分布

(森岡・木南編1997、高瀬編1997、竹村・山内編2003、森岡・坂田編2004、山本編2002から 土器実測図再トレース)

突帯を貼り付け、透かしは14方向で平均幅1.1cmである。白色を呈し、胎土は緻密〔森岡・木南編1996〕。三条九ノ坪遺跡（第16地点）は、日本で2番目に古い干支年銘木簡が出土したところである。圓足円面碗（第31図B）は、圓足部の小片で径については不確かな点がみられる。透かしは13方向に復元でき、その上部には1条の沈線がみられる〔高瀬編1997〕。津知遺跡と近接して神戸市東灘区に所在する深江北町遺跡（第9次調査）からは「十」字形透かしを有する優美な圓足円面碗が出土している（第31図E）。SR01から出土したもので、脚端部は欠損している。透かしは前述した「十」字形と長方形とを交互に配するようである〔山本編2002〕。

以上、若干の集成を試み、説明を加えたが、これらの資料はまだ氷山の一角とみられ、今後急速に増えていくものと思われる。包含層資料が多く、共存遺物から時期を特定できるものは少ないけれど、一応8世紀前半～末頃に使用時間の一点を有する資料が多いとみておきたい。また、型式分類では陸部が段差をもってあがり、陸部に堤がないAbタイプが目立つが、陸部に堤があるAaが稀に存在するようである〔神野・川越2003〕。資料の増加を待って改めて考察を加えたい。（森岡）

引用・参考文献目録

- 石井則孝 1985 『陶硯』(考古学ライブラリー 42) ニュー・サイエンス社
- 尾上 実 1983 「南河内の瓦器硯」『藤沢一夫先生古稀記念古文化論叢』刊行会
- 清水靖夫 編 1995 「西宮1884-1886」『明治前期・昭和前期 神戸都市地図』柏書房
- 神野 恵・川越俊一 2003 「平城京出土の陶硯」『古代の陶硯をめぐる諸問題—地方における文書行政をめぐって—』研究報告資料 独立行政法人 文化財研究所 奈良文化財研究所
- 鈴木忠昭 1985 「発掘調査で検出された足跡の検討結果について」『赤堀城跡—四日市都市計画道路事業 3・4・24掘木日永線に伴う緊急発掘調査—』<四日市市埋蔵文化財調査報告16> 四日市市教育委員会
- 高瀬一嘉 編 1997 『芦屋市所在 三条九ノ坪遺跡—被災マンション等再建事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』<兵庫県文化財調査報告書第168冊> 兵庫県教育委員会
- 竹村忠洋 編 1999 『津知遺跡第17地点発掘調査概要報告書—芦屋西部第二地区土地区画整理事業(津知第2公園)に伴う震災復興調査—』<芦屋市文化財調査報告第34集> 芦屋市教育委員会
- 竹村忠洋・山内芳子 編 2003 「津知遺跡第142地点ほか発掘調査報告書—芦屋西部第二地区震災復興土地区画整理事業に伴う震災復興調査の成果—」<芦屋市文化財調査報告第46集> 芦屋市教育委員会
- 辻 康男 2003 「遺跡をとりまく自然環境」『津知遺跡第142地点ほか発掘調査報告書』(前掲)
- 中村 浩 2001 『和泉陶器窯 出土須恵器の型式編年』芙蓉書房出版
- 西口壽生 2003 「畿内における陶硯の出現と普及」『古代の陶硯をめぐる諸問題—地方における文書行政をめぐって—』(前掲)
- 橋本征治 1971 「戦後の農業」『新修 芦屋市史 本篇』第7章第9節1項 芦屋市役所
- 武藤 誠ほか 編 1971 『新修 芦屋市史』本編 芦屋市役所
- 森岡秀人 1993 「日吉神社石祠の拓本調査」『なりひら 芦屋市立美術館だより』VOL.11・'93/6 芦屋市立美術館
- 森岡秀人 2001 「摂津国菟原郡葦屋郷・賀美郷考証覚書」『考古学論集』第5集 考古学を学ぶ会
- 森岡秀人 2003 「摂津・八十塚古墳群と菟原郡葦屋郷・賀美郷の古代史」『八十塚古墳群の研究』<芦屋市文化財調査報告第33集> 関西大学文学部考古学研究報告第7冊> 関西大学
- 森岡秀人 2004 「IV 総括」『津知遺跡(第198・222地点)発掘調査報告書—芦屋西部第二地区震災復興土地区画整理事業に伴う震災復興調査の成果—』<芦屋市文化財調査報告第55集> 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・木南アツ子 編 1996 「平成7年度国庫補助事業 阪神淡路大震災復興・復興に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書」<芦屋市文化財調査報告第28集> 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・坂田典彦 編 2002 「六条遺跡発掘調査報告書—芦屋西部第一地区震災復興土地区画整理事業・清水公園建設事業に伴う六条遺跡(第17・18地点)の事前調査記録—」<芦屋市文化財調査報告第41集> 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・竹村忠洋 編 2001 『芦屋市埋蔵文化財包蔵地分布地図利用の手引き』<芦屋市文化財調査報告第40集> 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・竹村忠洋・古川久雄 編 1999 「芦屋鹿寺遺跡(第53地点)・寺田遺跡(第104地点)震災復興埋蔵文化財確認調査概要報告書—津知川排水区雨水管布設工事(東川用水路推定地)に伴う確認調査—」<芦屋市文化財調査報告第35集> 芦屋市教育委員会
- 森田 稔 1995 「中世須恵器」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編
- 森田 稔 1996 「東播系中世須恵器生産の成立と展開—神出古窯址群を中心に」『神戸市立博物館研究紀要』第3号 神戸市立博物館
- 山本雅和 編 2002 「深江北町遺跡 第9次埋蔵文化財発掘調査報告書—葦屋郷家園遺跡の調査—」神戸市教育委員会
- 和田秀寿 1982 「芦屋における用水路 I—東川用水路の現状と復元—」『地域史研究 芦の芽』第35号 芦の芽グループ
- 和田秀寿 1994a 「よみがえる津知の歴史 I (中世編)—津知遺跡が語るもの—」『なりひら 芦屋市立美術館だより』VOL.16・'94/9 芦屋市立美術館
- 和田秀寿 1994b 「よみがえる津知の歴史 II (原始・古代編)—津知遺跡が語るもの—」『なりひら 芦屋市立美術館だより』VOL.17・'94/12 芦屋市立美術館



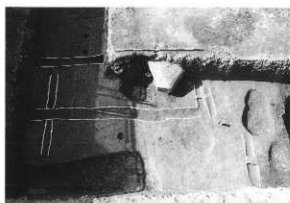
西区 トレンチ2 機械掘削風景（西から）



西区 トレンチ2 機械掘削風景（南から）



西区 トレンチ1 遺構面1（東から）



西区 トレンチ1 遺構面1（南から）



西区 トレンチ1 遺構面2（南から）



西区 トレンチ1 調査風景（東から）



西区 トレンチ1 遺構面3（南から）



西区 トレンチ1 遺構面3（東から）



西区 トレンチ2 遺構面1 (南から)



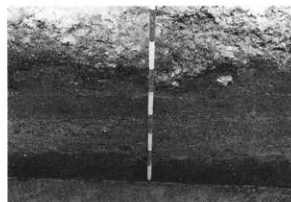
西区 トレンチ2 遺構面3 (南から)



東区 トレンチ2 北壁土層断面



東区 トレンチ1 遺構面3 (西から)



北区 トレンチ3 東壁土層断面



東区 トレンチ1 南壁土層断面



東区
トレンチ2
完掘状況
(西から)



北区 トレンチ4 完掘状況 (南から)

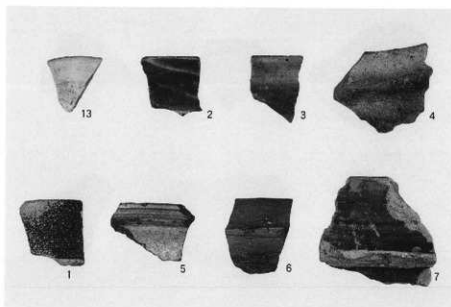
北区
トレンチ3
完掘状況
(北から)



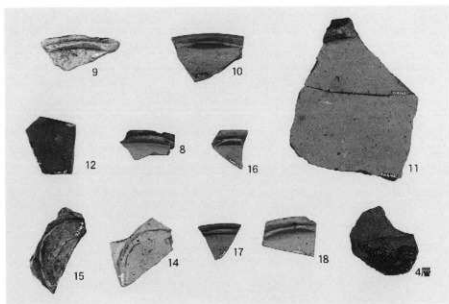
調査終了後
の状況
(南から・奥
が六甲前山)



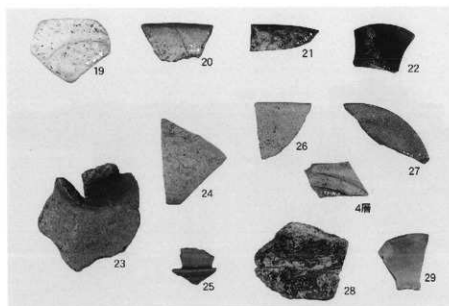
出土遺物
(1～3層)



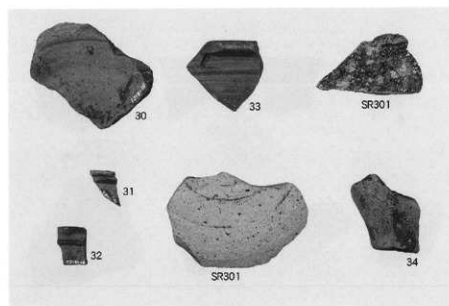
出土遺物
(3～4層・
遺構面1)



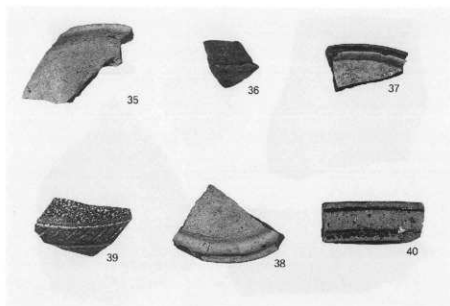
出土遺物
(4・5層・
遺構面1・
SR302)



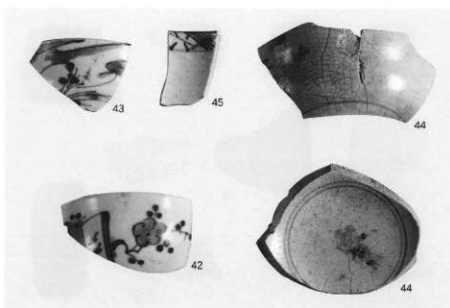
出土遺物
(SR301)



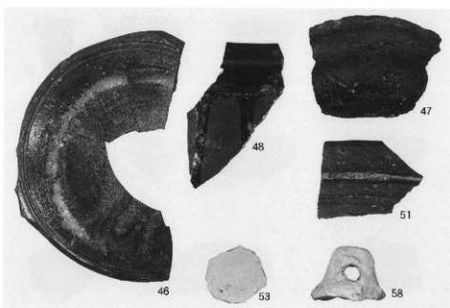
出土遺物
(6層)



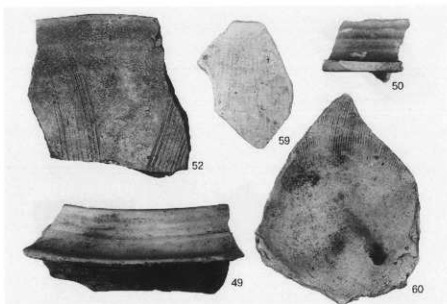
出土遺物
(1・2層)



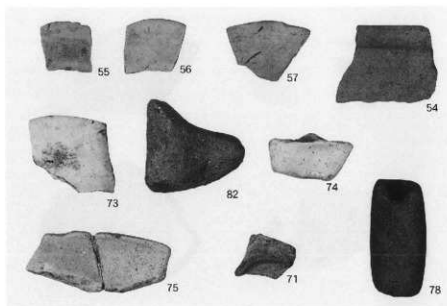
出土遺物
(1・2層・
近世以降の
土器溜り)



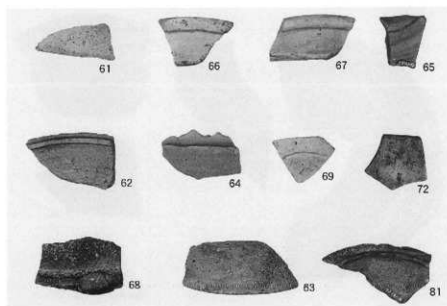
出土遺物
(1・2層・
近世以降の
礫・土器溜り)



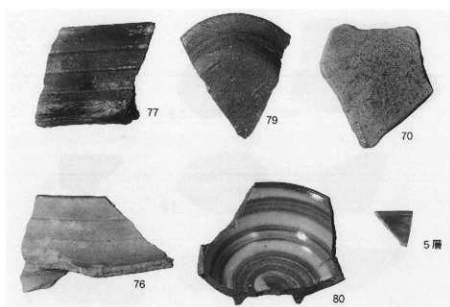
出土遺物
(近世以降
の礫・土器
溜り3・4層)



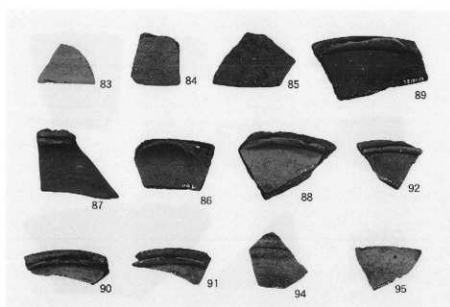
出土遺物
(3・4層)



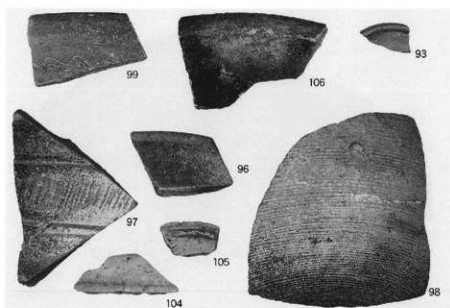
出土遺物
(3～5層)



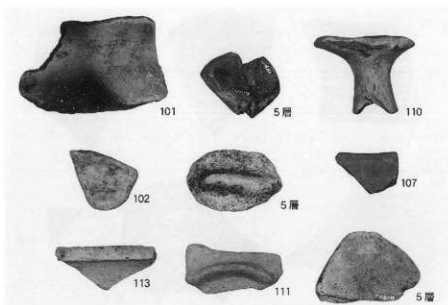
出土遺物
(5層)



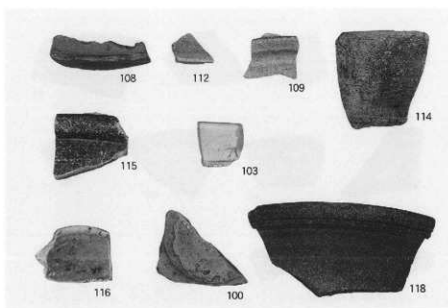
出土遺物
(5・6層)



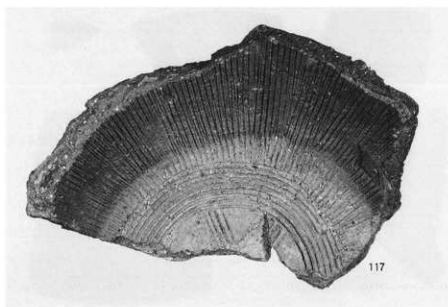
出土遺物
(4・5・6層)



出土遺物
(4・5層)



出土遺物
(4層)



報告書抄録

ふ り が な	つじいせき (だい181ちてん) はくつちようさほうこくしょ
書 名	津知遺跡 (第181地点) 発掘調査報告書
副 書 名	共同住宅建設事業に伴う遺跡西限部の様相把握
巻 次	
シ リ ーズ 名	芦屋市文化財調査報告
シリーズ番号	第50集
編 著 者 名	森岡秀人・坂田典彦
編 集 機 関	芦屋市教育委員会
所 在 地	〒659-8501 兵庫県芦屋市精道町7番6号 TEL. 0797-31-9066
発 行 年 月 日	2004年 (平成16年) 5月31日

所収遺跡名		津知遺跡（第181地点）		確認調査担当者　森岡秀人		
				発掘調査担当者　森岡秀人・坂田典彦		
所　在　地		兵庫県芦屋市津知町、西部第二地区震災復興土地区画整理地区27街区11の一部、12、20、21、22の一部				
コ　ー　ド		北　緯	東　経	調　査　期　間	調　査　面　積	調　査　原　因
市　町　村	遺跡番号	34° 43' 31"	135° 17' 57"	(確認)20021226	(確認) 21.69㎡	共同住宅建設に伴う事前調査
28206	T J 181			(発掘)20030425～20030528	(発掘) 202㎡	
所収遺跡名	種　別	時　代	主な遺構	主な遺物	特　記　事　項	
津知遺跡 (第181地点)	生産跡	近現代	隼溝・ビット土坑	陶磁器・土師器 ・須恵器	土地利用の変遷を把握	
		近世	隼溝・土坑	陶磁器・土師器 ・須恵器	圍足内面硯が出土	
		古墳時代～古代	自然流路	弥生土器・土師器 ・須恵器		

◆◆◆◆◆◆◆◆ 編 集 後 記 ◆◆◆◆◆◆◆◆

平成14年度頃より、本遺跡の範囲内では民間開発が増える傾向になった。震災復興のレベルが公共工事の進捗に伴って進み、土地区画整理事業の街路部分から街路内の民間宅地の再開発へと変化し始めていることを示唆している。ひとびとの復興が住境に入ってきた証しであり、津知町界限でも共同住宅の建設などがこれからますます増加することであろう。

今回発掘調査を実施した津知遺跡の第181地点は、民間共同住宅建設を契機としたものであり、その性格上、原因者負担によって発掘調査を行ったが、地権者からは調査の遂行に際し、多くの協力を得た。出土したさまざまな歴史情報の報告を終えた今、心から感謝申し上げたい。

本報告をもって本市の文化財調査報告書も第50冊に達した。そのうちちょうど50%が阪神・淡路大震災以降に編まれたものであるから、その比重に驚きの念を禁じ得ない。今後は、未報告の遺跡を含め、1冊でも早く公にできるよう努力したい。最後に、津知町の発展を心よりお祈りしたい。

(森岡秀人・坂田典彦)

※裏表紙図は、本書第31図を転載している。

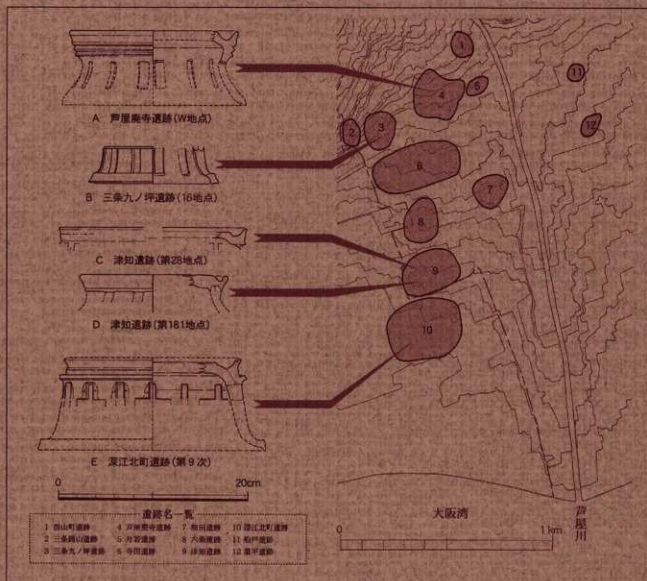
芦屋市文化財調査報告 第50集

津知遺跡(第181地点) 発掘調査報告書

——共同住宅建設事業に伴う遺跡西限部の様相把握——

印刷発行	平成16年5月31日
発行者	芦屋市教育委員会 〒659-8501 兵庫県芦屋市精道町7番6号 TEL 0797-31-9066 FAX 0797-38-2089
編集者	芦屋市教育委員会社会教育部文化財課 〒659-8501 兵庫県芦屋市精道町7番6号 TEL 0797-31-9066 FAX 0797-38-2089
印刷	株式会社グランド印刷 〒770-0941 徳島県徳島市万代町6丁目20-15 TEL 088-622-8448

Ashiya Archaeological Record 50



2004.5

Ashiya City Board of Education, Japan